

半可通さ——(それでも彼の面前ではいくらか少なかつたが、然し彼が居ない時には更にひどいと、アーダはいつもくり返し云つてゐた)——、それからまた、つまらない問題や可なり淫らな問題へいつも亘つてゆく、不謹慎で饒舌な彼女等の好奇心、凡てさういふ曖昧な多少獸的な雰圍氣に、彼は恐ろしく困らされたが、それでもまた心を惹かれた。なぜなら彼はさういふ種類のことを少しも知らなかつたから。その二人の小さな獸共は、つまらないことを話し合ひ、とりとめもないことを語り合ひ、愚かな様子で笑ひ、嬉しさうに眼を輝かしながら、淫逸な話を續けるので、さういふ會話の中に居ると彼は面喰つてしまつた。そしてミルハが立ち去るとほつと安堵するのであつた。二人の女と一緒にすると、彼には言葉の分らない外國の土地のやうに思はれた。考へを通じ合ふことが出来なかつた。彼女等は彼の言葉には耳も傾けなかつた。外國人たる彼を嘲笑つてゐた。

アーダと二人きりの時には、やはり違つた二つの言葉を使ひはしたが、それでも、互に了解するために二人共、少くとも努力はしてゐた。然し實を云へば、彼は彼女を了解すればするほど、益々了解してゐないのであつた。彼女は彼が知つた最初の女性だつた。あの憐れなザビーネも女性の一人ではあつたが、彼は彼女を少しも知つてゐなかつた。彼にとつては、彼女はたゞ心の夢だけとなつてゐた。然るにアーダは、彼に失つた時を回復させる役目となつ

た、彼は此度こそ女性の謎を解かうとつとめた——恐らくは何等かの主義を求めやうとする人々にとつてしか謎ではない所の謎を。

アーダは何等の知力をも具へてゐなかつた。がそれはまだ些細な缺點だつた。もし彼女がそれを諦めてゐたら、クリストフもそれを諦めたであらう。然し彼女は、つまらないことばかり頭を向けてゐながらも、精神的な事柄にも通じてゐると自負して、確信を以て萬事を判断した。彼女は音楽のことを話し、クリストフが最もよく知つてゐる事柄を彼に説明してやり、絶對的な裁定否定を明言した。彼女を説伏しやうとしても無駄であつた。彼女は萬事に對して主張と疑惑とを持つてゐた。やたらに氣むづかしいことを云ひ、頑固で傲慢であつて、何物をも理解しやうとはしなかつた——理解することが出来なかつた。實際彼女は、何にも理解してゐないといふことには頑として應じなかつた。もし彼女が、その缺點と美點とを持つてたゞ生地まぢのまゝでゐやうと諦めてゐたなら、彼は更に如何ほどかよく愛してやつたことだらう！

全く彼女は、考へるといふことを殆んど心にかけてゐなかつた。食べ飲み歌ひ踊り叫び笑ひ眠ることだけを、心にかけてゐた。幸福にしてゐたいと思つてゐた。そしてそれは、もし成功してゐたら極めて結構なことだつたらう。然しながら、幸福なるために天賦の才を持つ

てはゐたけれども、大食であり、怠惰であり、淫蕩であり、クリストフを嫌がらせまた面白がらせてゐた無邪氣な利己心を具へてはゐたけれど、即ち約言すれば、友達に對してはなすが、惡徳の幸福な所有者に對して人生を愉快ならしむる所の、殆んどあらゆる惡徳を所有してはゐたけれど——（それになほ、幸福な顔付をしてゐたが、この幸福な顔付は、少くともそれが綺麗である以上は、凡て近寄る人達の上に幸福を光被するものではないか？）——で兎に角、生存と自己とに満足すべき多くの理由がありはしたけれど、アーダは、満足するだけの知力さへ具へてはゐなかつたのである。健康さうな様子をし、溢れるばかりの快活さを有し、猛烈な食欲を具へ、清新で、陽氣で、美しい丈夫なこの娘は、自分の健康を氣遣つてゐた。馬のやうに大食しながら、身體の弱いことを歎いてゐた。あらゆる愚痴をこぼしてゐた、もう歩けない、もう息がつけない、頭痛がする、足が痛む、胃が痛む、心が痛む、など。あらゆるものを恐がり、馬鹿なほど迷信家で、何處にでも物の前兆を認めてゐた。例へば食卓では、ナイフ、十字に組合した肉刺、客の數、ひつくり返つてゐる鹽入れなどがあつて、災難を避けるために澤山の禁呪まじなひをしなければならなかつた。散歩をしてると、鳥の數を數へ、それがどちらへ飛ぶかを必ず觀察した。また心配さうに足下の道を窺ひ、もし午前中に蜘蛛が通るのを見つけると、非常に悲しがつて、引返したがつた。それをむりに續けて散

歩させるには、もう正午過ぎなので前兆は凶から吉へ變つたのだと説き伏せるより、外に何等の手段もなかつた。また夢を氣にしてゐた。彼女はいつも長々とクリストフに夢の話をした。その一寸した些事を忘れても、幾時間もかゝつて思ひ出さうとした。たゞ一つの事柄も彼に聞かせないではおかなかつた。それは全く荒唐無稽な事柄の連続であつて、可笑しな結婚、死人、裁縫女、王侯、滑稽なまた時には猥褻な事柄など、凡てが問題になつてゐた。彼はそれに耳を傾けなければならぬし、意見を吐かなければならなかつた。彼女はそれらの愚にもつかない幻影に、終日つきまとはれてゐることも屢々だつた。世の中は悪く出來てるものだと考へ、事物や人々をぶしつけに眺め、やたらに歎息してクリストフを困らした。そして彼は、自家の陰鬱な小市民達の許をいくら逃げ出しても、やはり此處にもまた、永遠の敵たる「陰氣な非ギリシヤ的、憂鬱病者」を見出したのである。

さういふ不機嫌な愚痴の最中に、いつも突然、また快活な様子が騒しく大袈裟に現はれてくるのであつた。するともう、先刻の苦情と同じく、その快活さにも手のつけやうがなかつた。理由もないのにいつまでも續くかと思はれるほど大笑ひをし、畑の中を駈けずり廻り、狂氣じみた仕業をし、子供のやうに戯れ、大喜びで馬鹿なことをし、土くれや汚い物をかきまはし、畜類や蜘蛛や蟻や蚯蚓などをいぢくり、それをいぢめ、害を加へ、小鳥を猫に、蚯

蜎を鶏に、蜘蛛を蟻に、互に食はせ、而も悪心あつて爲すのではなく、全く無意識的な加害の本能から、好奇心から、無爲退屈な心から、それを爲すのであつた。或はまた倦むことなき欲求を以て、下らないことを云ひ、何の意味もない言葉を何十度となく繰り返し、人を嫌がらせ、苛ら立たせ、擲諭し、激怒させることもあつた。而も、誰か——誰でも構はない——道に姿を現はすと、また嬌態が初まつた。すぐに彼女は、元氣よく口を利き、笑ひ聲を立て、騒ぎ立て、變な表情をし、人目を引いた。わざとらしい突飛な行動をした。クリストフは今に彼女が眞面目らしいことを云ひ出すだらうと、びく／＼しながら豫感した——そして、果していつもその通りだつた。彼女は感傷的になつた。而も他の場合と同じく、此度もまた法外だつた。恐ろしい勢で感情をぶちまけた。クリストフはそれに惱まされて、撲りつけた。誠實といふものは、知力や美貌と同じ位滅多にない賦性で、萬人にそれを要求するのは誤つてゐたといふことを、彼はまだ知らなかつた。彼は虚言を忍ぶことが出来なかつた。而もアーダは彼にひどく嘘をついた。明かな事實が現はれてゐても平氣で絶えず嘘をついた。彼に不快を興へたことを——彼の氣に入つたことをも——すぐに忘れてしまふ驚くべき容易さを、その時々調子に任して生活してゐる女が一般に有する忘却の容易さを、彼女は持つてゐた。

つてゐた。

そして、それにも拘らず二人は愛し合つてゐた。互に心から愛し合つてゐた。アーダも愛にかけては、クリストフと同様に誠實だつた。その愛は、精神の同感の上に立つてはゐなかつたが、それでもやはり眞實のものだつた。それは下等な情熱とは何等の共通點をも持つてはゐなかつた。青春の美しい愛であつた。如何にも肉感的なものではあつたが、何にも卑俗なものを持つてはゐなかつた。なぜならその中では凡てが若々しかつたから。卒直で殆んど清廉で、慾望の燃え立つ清純さに洗はれた愛だつた。アーダは、なか／＼クリストフほど初心ではなかつたとは云へ、まだ青春の心と身體との立派な特權を持つてゐた。その感覺の清新さは、小川のやうに清澄潑瀾として、殆んど純潔の感を興へ、何物にも妨げられることがなかつた。彼女は普通の生活に於ては利己的で平凡で不誠實ではあつたが、愛のために、素朴に眞實に殆んど善良にさへなつてゐた。他人のために自己を忘れることによつて見出される喜びを、彼女は理解するほどになつてゐた。クリストフはその様子を嬉しげに眺めた。すると、彼女のために死んでも惜しくないやうな氣がした。愛する魂はその愛のうちに、如何に可笑しなまた切實な幻を挿入することであるか！ 戀人に自然な幻想は、クリストフのうちに在つては、あらゆる藝術家に固有の幻想力によつて更に強調せられてゐた。アーダの一つ

の微笑も、彼にとつては深い意義を持つてゐた。やさしい一言は、その心の善良さの證據であつた。彼は宇宙に在るあらゆる善と美とを彼女のうちに於て愛してゐた。彼は彼女を、己の自我、己の魂、己の存在、だと呼んでゐた。二人は一緒に、愛情の餘り涙を流した。

二人を結びつけたものは、たゞ快樂ばかりではなかつた。追想と夢想との得も云へぬ詩趣であつた——それも彼等二人の追想なのか、或はまた、彼等以前に愛してゐた人々、彼等以前に……彼等のうちに……存在してゐた人々、さういふ人達の追想と夢想なのか？……二人は互にそれと云はずに、恐らくはそれと知らずに、心のうちに懐いてゐた、林の中で出逢つた最初の瞬間の幻影を、一緒に過した最初の日々と夜々との幻影を、互に腕の中に抱かれ合ひ、身動きもせず、考へもせず、愛と無言の喜悅の奔流に浸つて、うと／＼としたそれらの眠りを、心を掠めるだけでも既に人知れず顔色が變り一身が快感のうちに融け去つてゆくほどの、突然な追憶、種々の事象、隱密な考へなどが、蜜蜂のやうな羽音を立て、二人を取り巻いてゐた。燃え立つやさしい光り。……心は餘りに大きな楽しさに壓倒されて、惘然となり黙り込んでゆく。春の初光にうち震える大地の沈黙、熱っぽい懶さ、疲れきつた神秘的な微笑……。若々しい二つの身體の清新な愛は、四月の朝である。それは四月のやうに過ぎてゆく。心の若さは、太陽の朝食である。

*

*

*

*

クリストフとアーダとの戀愛關係を益々密接ならしめたものは、殊に彼等に對する世間の批評であつた。

二人が最初に出逢つたその翌日から、近くの人々は皆それを知つた。アーダは少しもその情事を隠さうとしなかつた。寧ろ彼を手に入れたことを自慢にしたがつてゐた。クリストフはもつと内密にしたがつてゐたが、然し人々の好奇心につきまとはれてるのを感じた、そしてアーダの前を逃げやうとする様子をしたくなかつたので、わざと彼女と一緒に所を見せつけてゐた。小さな町中にはつと噂がたつた。クリストフの管絃樂隊の仲間、彼に嘲笑的なお世辭を述べた。彼は自分のことに他人が干渉するのを許し得なかつたので、返辭もしなかつた。官邸でも、彼の不品行が非難された。中流市人等は、彼の行ひを酷しく批評した。彼は數軒の音樂教授の口を失つた。また他の家では、それ以來母親等は、宛もクリストフが大事を娘を奪はうと思つてゐるかのやうに、疑ひ深い様子をして、娘の稽古に立ち合はなければいけないと考へた。令嬢達は何にも知らないことゝ見做されてゐた。然し、固より彼

女等はすつかり知つてゐた。そして、クリストフは趣味を解しないとして冷遇しながら、もつと詳しいことを非常に知りたがつてゐた。クリストフの評判がいゝのは、小さな商人や店員などの間ばかりであつた。然しそれも長続きはしなかつた。彼は一方の悪評に對するのと同じく、他方の好評に對しても腹を立てゝゐた。そして悪評の方は何とも仕様がなかつたので、稱讚の方が續かないやうな策を取り、而もそれはさほど困難なことではなかつた。彼は世間一般の無遠慮を憤つてゐた。

彼に對して最も激昂したのは、ユスツス・オイレルとフォーゲル一家とであつた。クリストフの不品行は、直接一身上の侮辱のやうに彼等には思はれた。それでも彼等は、何等眞面目な計畫を彼の上に据ゑてるのでもなかつた。彼等は——殊にフォーゲル夫人は、藝術家氣質なるものを輕蔑してゐた。然し彼等は、元來苦勞性の精神を持つてゐたし、運命に苦しめられてると信じがちな精神を持つてゐたので、クリストフとローザとの結婚が實現されさうもないことが愈々確かになると、その結婚に執着してゐたのだと自ら思ひ込んだ。彼等は其處に例の不運の一つの兆^{しるし}を見て取つたのである。もし運命が彼等の違算の責を帯びるものとするならば、理論上クリストフには責任がない筈だつた。然しフォーゲル一家の者の理論は、苦情を云ふべき理由を最も多く見出し得させるやうな理論であつた。それで彼等は、クリス

トフが不品行をするのも、單に彼一個の楽しみのためにはばかりではなく、また自分等を侮辱せんがためにである、と判断した。その上彼等は、不品行そのものをも忌み嫌つた。彼等は極めて信仰深く、道徳心強く、家庭的の徳義心に厚かつたので、さういふ人達の例として、彼等の考へに依れば、肉慾の罪は最も恥づべきものであり、最も重大なものであり、また唯一の恐るべきものであるから唯一の罪とも云へるのであつた——(相當の者なら決して竊盜や殺害の心は起すものでないといふことは、餘りに明かなことだつた)。——それでクリストフは、徹頭徹尾正しからぬ者だと、彼等には思はれた。彼等は彼に對する態度を變へた。彼が通りかゝると、冷酷な顔付をして横を向いた。クリストフの方では、彼等と話をしたくも思つてはゐなかつたので、それらの澄し込んだ様子を見る毎に肩を聳かした。アマリアは、彼を輕蔑して避けるやうな風をしながらも、心にたまつてゐることを云つてやるために、しきりに彼に近づきたがつてゐたが、彼はその無禮な仕打ちをも、見ないふりをしてゐた。

クリストフが心惹かれたのは、たゞローザの態度だけであつた。この少女は、家族の誰よりも一層酷しく彼を非難した。それは、クリストフの新らしい戀が、彼から自分が愛せられる機會を、全く破壊してしまふやうに思はれるからではなかつた。彼女はさういふ機會が一つもないことを知つてゐた——(やはり續けて希望はかけてゐたらうけれど。……彼女は永

久に希望をかけてゐるだらう！——然し彼女は、クリストフを偶像視してゐた。然るにその偶像が壊れかけたのである。それは最もつらい苦痛だつた……彼女の純潔な心のうちでは、彼から輕蔑せられ忘れられることよりも、更に殘忍な苦痛だつた。彼女は清教徒的なやり方で、狭小な道德のうちに育てられ、その道德を熱心に信じてゐたので、クリストフについて聞き知つた事柄は、たゞに彼女を悲しませたばかりではなく、また嫌惡の情をさへも起させた。彼がザビーネを愛してゐる時から、彼女は既に苦しんでゐた。その自分の崇拜者に對する幻影を、既に幾何か失ひかけてゐた。クリストフが斯くも凡庸な魂を愛し得るといふことは、不可解なまた餘り光榮でもないことのやうに彼女には思はれた。然し少くとも、その愛は純粹であつて、且つザビーネはそれに相當し得ないでもなかつた。最後に死が通り過ぎて、凡てを清めたのであつた。……然しすぐその後で、クリストフが他の女を愛さうとは——而も如何なる女か！——それは卑しいことであり、嫌惡すべきことだつた！ 彼女は彼に對抗して、死んだ女を庇護するやうになつた。その女を忘れたことを、彼に許し得なかつた。……が嗚呼、彼は彼女よりもなほ一層その女のことを考へてゐたのである！ 然し彼女は、熱烈な心の中に二つの感情を同時に容れ得る餘地があらうとは、夢にも思はなかつた。現在を犠牲にしなければ過去に忠實であり得ないものだと、信じてゐた。清くて冷かな彼女は、人

生についてもまたクリストフについても、何等の觀念をも持つてゐなかつた。凡てが彼女自身と同じやうに、純粹で狭小で義務に服従してゐなければいけないやうに、彼女には思はれた。彼女は身心共に凡てに於て謙讓であつて、たゞ一つの誇りをしか持つてゐなかつた。それは純潔の誇りだつた。そして彼女は、自分についてもまた他人についても、それを要求してゐた。クリストフがかくまで墮落したことを、彼女は許してやり得なかつたし、永久に許してやり得なかつたであらう。

クリストフは彼女に話をしようとなつたとめた。けれど辯解しようとはしなかつた——（純潔無邪氣な娘に何を云ひ得ることがあつたらう？）——たゞ、自分は彼女の友であること、彼女の尊敬を切望してゐること、自分にはまだその權利があること、などを彼女に確信させてやりたかつた。彼女が不條理にも自分から遠ざかるのを、防がうと欲した。——然しローザは嚴めしく口を噤んで、いつも彼を避けてゐた、彼は彼女から輕蔑されてゐることを感じた。彼はそれを苦しみまた憤つた。自分はその輕蔑に相當する者ではない、といふ自覺があつた。それでも彼は、遂に狼狽してしまつた。自分に罪があると考へた。彼はザビーネのことを考へながら、最も痛ましい非難を自ら自分に浴せた。彼は自ら苦しんでゐた。

然し彼は、自分を押し流す流れに抵抗することが出来なかつた。彼は人生は罪惡的なものだ^{と考へてゐた}。そして人生を見ないで生きるために、眼を閉ぢてゐた。それほど彼は、生きたく、幸福でありたく、愛したく、信じた^{い欲求を、持つてゐた}。……確かに、彼の愛のうちには何等輕蔑すべきものはなかつた。アーダを愛するのは、賢くなく、憐惻でなく大して幸福でさへないかも知れないと、彼はよく知つてゐた。然し何の賤しい點があつたらうか？ とひ——（彼は信じまいとつとめてゐたが）——アーダには大なる道德的の價値がなかつたと假定しても、彼女に對する彼の愛は、何によつてそれだけ純潔の度が少いと云へたであらうか？ 愛は愛する者のうちに在るので、愛せられる者のうちに在るのではない。愛する者に價値があれば、その愛にもそれだけの價値があるものだ。純潔な者に在つては、凡てが純潔だ。強壯な者や健全な者に在つては、凡てが純潔だ。愛は、或る種の小鳥をその最も美しい色彩で飾り立てるものであり、正しい魂から、その最も高尚なものを引出させるものである。己にふさはしくないものは一も相手に示したくないといふ欲求から、人はもはや、愛が刻んだ最も美しい像に調和する思想や行爲にしか、喜びを見出さなくなつてくる。そして魂の浴する青春の泉は、力と喜悅との潔い光輝は、麗はしく且つ有益であつて、心を益々偉大ならしむるものである。

知友等から誤解されてゐることは、彼の心に憂苦を滿さしめてゐた。然し最も重大な憂苦は、母親までが心配し初めたことであつた。

この善良な婦人は、フォーゲル一家の狭小な主義を共に奉じてはゐなかつた。彼女は餘り目近に、眞の悲しみを見てきたので、他の悲しみを想像し出さうとはしなかつた。自分を卑下し、生活に困憊し、生活から大した喜びも受けず、また生活に喜びをも大して求めず、成るがまゝに諦め、事變を理解しようともつとめないで、彼女は、他人を判断し非難すまいと用心してゐた。自分にはその權利がないと信じてゐた。自分を極めて愚かだと考へて、他人が自分と同じやうに考へないから間違つてゐるとは見做さなかつた。自分の道德と信念との一徹な規則を他人にも押しつけやうとする^{ことは、彼女には笑ふべきことのやうに思はれた}。その上、彼女の道德と信念とは、凡て本能的なものであつた。自分一身に關しては敬虔で純潔であつた彼女は、或る種の弱點に對する下層の人々の寛大さを以て、他人の行ひに眼をつぶつてゐた。嘗て舅のジャン・ミシエルが彼女に對して懐いてゐた不滿の一つも、さういふ點に在つた。彼女は、尊むべき人々とさうでない人々との間に、充分の區別をつけてゐなかつた。相當の婦人なら知らないふりをすべきであるやうな、附近で評判のあだつばい娘等にも、往來や市場なんかで立ち止つて、親しく握手をしたり話しかけたりすることを、彼女は平氣で

やつてゐた。善悪を區別することは、罰したり許したりすることは、之を神にうち任してゐた。彼女が他人に求める所は、互に生活を氣樂ならしむるためにごく必要な、多少のやさしい同情ばかりであつた。親切でさへあれば、といふのが彼女にとつては肝要なことだつた。

然しフォーゲル家に住んで以來、彼女は皆から變化せられつゝあつた。當時彼女はがっかりして反抗するだけの力がなかつただけに、一家の誹謗的な精神は、猶更容易に彼女を餌食にしてしまつた。アマリアが彼女を奪ひ取つた。朝から晩まで、二人一緒に仕事をし、アマリア一人人口を利きながら、すつと差向ひであるうちに、受身で壓倒されがちなルイザは、知らず識らずのうちに、凡てを判断し批評するやうな習慣になつてしまつた。フォーゲル夫人は、クリストフの行狀に對する自分の考へを、彼女に云はないでは置かなかつた。ルイザの平氣なのが癪に障つてゐた。自分達一家の者が憤激してゐる事柄を、ルイザが一向氣にも留めないのは、失禮なことだと考へてゐた。彼女の心をすつかり亂させることが出来ないのを、不満に思つてゐた。クリストフはそれに氣がついた。ルイザは思ひ切つて彼を非難することが出来なかつた。然し毎日、小心な不安な懇願的な意見がくり返された。彼は苛ら立つて亂暴な返辭をした。するともう彼女は何とも云はなかつた。然しその眼にはやはり心痛の色があるのを、彼は讀み取つた。家に戻つてきて、彼女が泣いてたことに氣付くことも時々あつた。

彼は母の性質をよく知つてゐたので、さういふ心配は彼女自身の心から出たものでないことを確信した。——そして、何處からその心配が來るかを知つた。

彼はそれを片付けてしまはうと決心した。或る晩、ルイザは涙を押へきれなくなつて、食事の最中に立ち上つた。クリストフはその悲しみの種を聞く隙もなかつた。彼は大膽に階段を跨ぎ下り、フォーゲル一家の許に押しかけていつた。彼は憤りに燃え立つてゐた。母に對するフォーゲル夫人の振舞を怒つてゐるばかりではなかつた。ローザを煽動して敵意を持たせたこと、ザビーネを中傷したこと、其他數ヶ月來しひて我慢をしてきた數々のこと、その仕返しをしてやらなければならなかつた。彼は數ヶ月以來、積り積つた怨みの荷を背負つてゐて、それを早く下してしまはうとした。

彼はフォーゲル夫人の室に飛び込んだ。そして、靜めようとしてもなほ激怒に震える聲で、母をあんな風にならせたのには何を話したのかと尋ねた。

アマリアはそれを非常に悪く取つた。自分の勝手なことを云つたまでとあると答へ、自分の行ひを誰にも報告する必要はない——まして彼に報告する必要はない、と答へた。そして日頃用意してゐた言葉を云つてやるために、その機會に乗じてつけ加へた、もしルイザが悲しんでゐるなら、その理由は彼自身の行狀以外に探すに及ばない、彼の行狀は、彼自身にとつ

ては恥辱であり、他の凡ての人にとつては醜惡であると。

六〇二

クリストフが攻撃を初めるには、向ふからの一つの攻撃で充分だつた。彼は激昂して叫んだ、自分の行ひは自分だけに關するものであること、自分の行ひがフォーゲル夫人の氣に入らうが入るまいが、そんなことは一向構はないこと、もし不平を云ひたければ、自分に向つて云つて貰ひたいこと、云ひたいことは何でも自分に向つて云へる筈だといふこと、云はれたつて自分は雨が落ちかゝつたほどにも思はないといふこと、然し自分は斷じて禁ずる——(よく聞くがい)——どんなことでも母に云ふのを禁ずるといふこと、そして、病身な年老いた憐れな女を攻撃するのは、卑劣な仕業だといふこと。

フォーゲル夫人は大聲を立てた。嘗て誰からも、そんな調子で物を云はれたことがなかつた。彼女は、子僧つ子から——而も自分の家で、説諭を受けるものか、と云ひ立てた。——彼女は彼を侮辱的な態度で取扱つた。

喧嘩の聲を聞きつけて、他の者も皆やつて來た——たゞフォーゲルを除いて。フォーゲルは自分の健康の害になるやうなことは、いつも避けてゐたのである。オイレル老人は、立腹してアマリアから證人に立てられて、將來は意見や訪問は差控へて貰ひたいとクリストフに酷しく頼んだ。自分達は彼の助けを俟たずとも、爲すべきことを知つて居り、義務を果して

居り、常に義務を果すだらう、と云つた。

クリストフは、出て行くと云ひ、もう二度と足を踏み入れるものかと公言した。けれども彼は、自分にとつては直接一身の敵となつてゐる例の「義務」について、心ゆくまで彼等に云つてやらないうちは、決して出て行かなかつた。そんな「義務」を云々するなら、自分は寧ろ惡德の方を好むだらう、と彼は云つた。フォーゲル一家のやうな人達こそ、しきりに善を不愉快なものにしながら、善を棄すものであつた。彼等との對照によつてこそ人は、不正ではあるが然し愛相のいゝにこやかな人達に、誘惑を感じるものであつた。遂には生活を陰鬱にし害毒するほどの堅苦しい横柄な嚴格さで、つまらない雜役や取るに足らぬ行ひなど、凡てに義務といふことを適用するのは、却つて義務の名を潰すものである。義務は特殊なものである。實際の献身の場合のために、義務を保留しておかなければいけない。自分の不機嫌や、他人を不快がらせやうといふ欲望などを、義務の名で蔽つてはいけない。自分が愚かにも又は不面目にも陰氣だからと云つて、凡ての人が陰氣であるやうにと願ひ、凡ての人に自分の病弱な攝生法を強ひんとするのは、理由のないことである。美德のうちで第一のものは、喜悅である。美德そのものは、幸福な自由なこだはりの無い顔付をしてゐなければいけない。善を爲す者は、自ら自身を喜ばせなければいけない。然しながら、フォーゲル一家の所謂常住の

義務、小學校教師みたいな壓制、やかましい口調、閑散な議論、不快な幼稚な理屈、喧騒、優雅の缺除、あらゆる魅力と禮節と沈黙とを缺いた生活、實際以上に生存を貧弱ならしむるものを一も見落さない淺薄な悲觀思想、他人を理解するよりも輕蔑する方を易しとする傲慢な非理知、凡てそれらの、偉大さも幸福も美もない凡俗も道德、それは實に醜惡な有害なものである。それは實に、美德よりも惡德の方に、一層人間的たるの觀を與へるものである。さういふ風にクリストフは考へてゐた。そして彼は、自分を傷つけた者を傷つけ返してやりたいといふ欲求に驅られて、自分も相手の人達と同様に間違つてゐるといふことに氣付かなかつた。

勿論この憐れな人達は、殆んど彼の觀察通りの者であつた。然しそれは彼等の罪ではなかつた。彼等の顔付や身振や思想を不愛相ならしめてしまつた、不愛相な生活の罪であつた。彼等は悲慘から——一擧に落ちかゝつて人を殺すか或は鍛へるかする大悲慘からではなく絶えずくり返される不運から、最初の日より最後の日に至るまで一滴づゝ落ちてくる小さな悲慘から、すつかり變化せられてしまつてゐた。……如何に悲しむべきことであるか！なぜなら、それらの皺寄つた表皮の下には、方正や善良や無言の勇氣など、如何に多くの寶が蓄へられてゐたことだらう！……一民衆の全力と、未來の全血氣とが！

*

*

*

*

クリストフが、義務は特殊なものだと信じたのは、誤りではなかつた。然し戀愛もやはり特殊なものである。凡てが特殊である。何かに價する凡てのものは皆——惡でさへもやはり（惡にも價值がある）——常習といふことより以上の敵を有しない。愛の致命的な敵は、毎日の消耗である。

アーダは倦怠し初めてゐた。クリストフの性質のやうに豊富な性質の中で、自分の愛を更新してゆくには、彼女は充分の知力を具へてゐなかつた。彼女の官能と浮誇的な精神とは、凡そ見出し得る凡ての快樂を愛から引出してしまつてゐた。彼女にはもはや、愛を破壊する快樂しか残つてはゐなかつた。彼女は一種のひそかな本能を持つてゐた。それは多くの女に、善良な女にも、共通な本能であり、また多くの男に、伶俐な男にも、共通な本能であつて、この本能を具へた男女は、仕事もせず、子供も拵へず、働きもせず——如何なることをも、生活をもせず——而も、餘りに多くの活力を持つてゐるので、平然と忍従しつゝ己の無用さを堪へ忍ぶことも出来ないのである。彼等は他人も自分等と同じく無用たらんことを望み、

他人をさうなさんために出来るだけつとめる。時とすると不本意ながらつとめてゐることもあつて、その悪い欲求に自ら氣付くと、憤然としてそれを卻ける。然し多くは、その欲求を守り育てる。そして各自の力に従つて——或る者は、僅かな親しい仲間内だけでひそかに——或る者は、廣く公衆に對して大規模に——、凡て生を有するもの、生を欲するもの、生に價するものを、悉く破壊しつくさんとつとめる。偉人や偉大な思想などを、己と同じ高さに引下げんと熱中する批評家——戀人を卑しくして面白がる娘——この二つは同種類の有害な二匹の畜生である。——たゞ後者の方がいくらか可愛い。

所でアーダは、クリストフを卑賤ならしめんために、彼を多少墮落させたかつたであらう。が事實彼女は、力を持つてゐなかつた。他人を墮落させるには、もつと知力が必要であらう。彼女はそれを感じてゐた。そして自分の愛がクリストフを何等害することが出来ないのは、彼女が彼に對して隠し持つてゐる大きな不平の一つだつた。彼女は彼を害しやうと望んでゐるとは自ら認めてゐなかつた。もし出来ても恐らくはしなかつたであらう。然しそれを自分の力で出来ないといふことが、癩に障るやうに思はれるのであつた。愛してくれる男を善化し或は悪化する力を自分は持つてゐるといふ幻を、女に與へてやらないのは、女に對する愛の缺乏を示すものである。そして、是非ともそれを實際にためしてみやうといふ心を、女に起

させるものである。クリストフはそれを心にかけてゐなかつた。或る時アーダは戯れに尋ねた。

「私のためになら音楽を捨て、下すつて？」（勿論彼女はそれを少しも願つてはゐなかつた）すると彼は直截に答へた。

「おうそんなことは、たとひお前にしろ、誰にしろ、出来るものかね。僕はどこまでも音楽をやるつもりだ。」

「それであなたは私を愛してると仰言るの？」と彼女はむつとして叫んだ。

この音楽といふものを、彼女は憎んでゐた——自分に少しも分らないだけに猶更、そしてまた、その眼に見えない敵を害してクリストフの熱情を傷つけるべき妙策を見出し得ないだけに猶更、彼女はそれを憎んでゐた。如何に彼女が、輕蔑の調子で音楽のことを語り、クリストフの作曲を凡庸視しようとも、彼はたゞ大笑ひをするだけだつた。アーダは激昂しながらも口を噤まざるを得なかつた。なぜなら、自分の滑稽なことが分つてゐたから。

然しながら、この方面では何とも仕方がなかつたとは云へ、彼女はクリストフのうちに、なほ容易に急所を刺し得る他の弱點を見出してゐた。それは彼の道德的信念であつた。クリストフは、フォーゲル一家との喧嘩にも拘らず、青春期の熱狂にも拘らず、本能的な貞節さ

を、純潔の要求を、まだ心に持つてゐた。彼はそれを意識してはゐなかつたが、然しそれがアーダのやうな女を、最初は驚かし惹きつけ魅惑し、次には面白がらせ、次には苛ら立たせ、次には憎悪の念を懐くまでに激させたのである。彼女はその點を正面から攻撃しはしなかつた。彼女は好佞な尋ね方をした。

「あなたは私を愛して下さるの？」

「愛するとも！」

「どれ位愛して下さるの？」

「出来る限り。」

「それぢや充分ではないわよ。……だがまあいゝわ……私にはどんなことをして下さつて？」

「何でも望み通りのことを。」

「悪いことでもして下さつて？」

「をかした愛し方だね。」

「そんなことはどうでもいゝのよ。して下さつて？」

「そんな必要はありやしない。」

「でも私がそれを望んだら？」

「お前が間違つてるんだ。」

「かも知れないわ。……で、して下さつて？」

彼は彼女を抱擁しようとした。然し彼女は押しつけた。

「悪いことでもして下さるの、どうなの？」

「厭だよ。」

彼女は怒つて背中を向けた。

「あなたは愛してゐないのね。愛するとはどういふことだか知らないのね。」

「さうかも知れない。」と彼は人のいゝ様子で云つた。

彼は、情熱に驅られた瞬間には、人と同じやうに馬鹿なことでも、恐らくは悪いことでも、またはそれ以上のこと——どんなことだか分つたもんぢやない——でも、自分はやりかねないといよく知つてゐた。然し冷かにそれを自慢にするのは恥づべきことだと思ひ、アーダにそれを明言するのは危険なことだと思つたに違ひない。本能的に彼は、相手の女が自分を監視してゐて、僅かな言葉をも注意してゐることを、感じてゐた。不利な尻尾しつぽを押へられるやうな隙を、彼女に與へたくなかつた。

幾度も、彼女はまた攻撃してきた。彼女は尋ねた。

六一〇

「あなたが私を愛して下さるのは、ほんとに私を愛してるからなの、または私があなたを愛してるからなの？」

「お前を愛してるからだ。」

「では、私があなただを愛さなくとも、やはり私を愛して下さるの？」

「あゝ。」

「そして、もし私が他の人^{ほか}を愛しても、やはり私を愛して下さるの？」

「さあ、それは僕には分らない……さうは思へない。……が何れにしても、お前は、僕が愛すると云ふ最後の女だらう。」

「でも何か今と變ることがあつて？」

「澤山ある。僕も多分變るだらう、お前も屹度變つてくる。」

「私が變つたら、どうなるの？」

「大變なことになるさ。僕は今のまゝのお前を愛してるんだ。もしお前が全く別な者になつたら、僕はもうお前を愛するかどうか受け合へない。」

「あなたは愛してゐないのよ、愛してゐないのよ！ そんな屁理窟が何になつて！ 愛する

か愛なしいか、どちらかだわ。もしあなたが私を愛してゐるんなら、私が何をしようと、いつでも變らず、そのまゝの私を愛して下さる筈だわ。」

「それは畜生のやうな愛し方だ。」

「私はさういふ風に愛して貰ひたいのよ。」
「それぢやお前は人を見違へたんだ、と彼は戯れて云つた、「僕はお前が求めるやうな者ぢやない。そんなことは、僕にはしようたつて出来やしない。それにまた僕はしようとも思はない。」

「あなたは俐口なのを大層御自慢ね。私よりも自分の知慧の方を餘計愛してゐるんだわ。」

「なに僕はお前を愛してるんだ、ひどいことを云ふ奴だね、お前が自分の身を愛してるよりもつと深くお前を愛してるんだ。お前が美しくつて善良であればあるほど、益々僕はお前を愛するんだ。」

「まるで學校の先生みたいね。」と彼女はむつとして云つた。

「何でも僕は美しいものが好きなんだ。醜いものは嫌ひさ。」

「私のうちにあつても？」

「お前のうちに在ると殊にさうだ。」

彼女は荒々しく足をふみ鳴した。

「私は批評されたかありません。」

「それぢや、僕がお前をどう思つてるか、そしてどんなに愛してるか、それを不平云ふがいよ。」と彼は彼女の心を和げるためにやさしく云つた。

彼女は彼の腕に抱かれたまゝになつて、微笑みをさへ浮べ、彼に接吻をさへ許した。然しやがて、もう忘れた頃だと彼が思つてる時に、彼女は不安さうに尋ねた。

「あなたは私のどういふ所を醜いと思つてるの？」

彼はそれを彼女に云ふまいと用心した。彼は卑怯な答へをした。

「何にも醜いと思つてる所はない。」

彼女は一寸考へ、微笑み、そして云つた。

「ねえ、クリストフ、あなたは嘘は嫌ひだと云つたわね。」

「輕蔑してるよ。」

「道理だわ、」と彼女は云つた、「私も輕蔑してよ。それに、私は安心だわ、ちつとも嘘をつかないから。」

彼はその顔を眺めた。彼女は本気で云つてるのだつた。その無自覺さが彼の心をつくろげ

さした。

「ではね、」と彼女は彼の頸に兩腕を巻きつけながら續けて云つた、「もし私が他の人を愛しても、そしてあなたにさう云つても、なぜあなたは私を怨まないの？」

「止してくれよ、僕をいつも苦しめるのを。」

「あなたを苦しめるんぢやないわ。他の人を愛していると私は云つてるんぢやないのよ、愛してはゐないとさへ云つてるわ。……でもこれから先、もし愛したら……？」

「まあ、そんなことは考へないでしょうや。」

「私は考へたいのよ。……あなたは私を怨まないの？ 私を怨むことが出来ないの？」

「僕は怨まないだらう、お前と別れるだらう。それつきりだ。」

「別れる？ どうしてなの？ 私がまだあなたを愛してゐても……？」

「他の男を愛しながら？」

「無論のことよ。そんなことはよくあるわ。」

「なに、僕達にはそんなことが起るものか。」

「なぜ？」

「なぜつて、お前が他の男を愛する時には、もう僕はお前を、ちつとも、もうちつとも、愛

ささないだらうからさ。」

六一四

「先刻は分らないと云つてたぢやないの。……それ御覽なさい、あなたは私を愛さないんだわ！」

「さうかも知れない。その方がお前のためにはいゝよ。」

「といふのは？……」

「お前が他の男を愛する時に、もし僕がお前を愛してゐたら、お前にも、僕にも、またその男にも、始末が悪くなるだらうからさ。」

「そうら！……あなたはもう無茶苦茶よ。では私は、生涯あなたと一緒になつてなけりやならないものなの？」

「安心おし、お前は自由だよ。いつでも僕と別れたい時には別れるがいゝさ。たゞ、それは一時の別れぢやなくて、永久のおさらばだよ。」

「でも、やはりあなたを愛してるとしたら、この私が。」

「愛し合つてゐる時には、互に一身を捧げ合ふものなんだ。」

「ぢやあ、あなたから捧げて頂戴！」

彼はその利己主義には笑はずに居れなかつた。彼女も笑つた。

「片方だけの献身は、と彼は云つた、「片戀になるだけだ。」

「そんなことはないわ。兩方も戀しくなるものよ。もしあなたが私に身を捧げて下さるなら、私はもつとあなたを愛してあげるわ。そして、クリストフ、御自分の方だつて考へてご覧なさい。自分は身を捧げたからといつて、あなたはどんなに深く私を愛するか知れないわ、どんなに幸福になるか知れないわ。」

二人は、一寸氣を外らして意見の眞面目な相違を忘れたのに、満足の笑みを洩らしてゐた。

彼は笑顔をして、彼女を見守つた。彼女は心の底では、自分で云つてゐる通りに、今すぐにクリストフと別れたくは少しもなかつた。彼は屢々彼女を怒らせ厭がらせはしたが、それでも彼女は、彼のやうな献身が如何に貴いかを知つてゐた。また彼女は誰も他の男を愛してはゐなかつた。戯れにあんなことを云つたのは、半ばは、それが彼に不愉快であることを知つてゐたからであり、半ばは、子供が汚い水の中を掻き廻して面白がるやうに、怪しい下品な考へを弄ぶことに楽しみを見出してゐたからである。彼はそれを知つてゐた。別に彼女を憎まなかつた。然し彼は、それらの不健全な議論に倦き、自分が愛して居りまた恐らく愛されてゐる、その不安定な混濁した氣質の愛と、暗々裡に行ふ闘ひに倦いてゐた。彼女のことを

自ら欺くために爲さなければならぬ努力に、彼は倦いてゐたし、時には泣くことにも倦いてゐた。彼は考へた。「なぜ、なぜ彼女はかうなんだらう？　なぜ人間はかうなんだらう？　實に人生はつまらないものだ！……」と同時にまた彼は、微笑みながら眺めた、彼の方を覗き込んでゐる綺麗な顔を、その青い眼、艶やかな色、にこやかで饒舌で、多少愚かで、濡れた齒並と舌との鮮かな輝きを見せて、半ば開いてゐる口を。二人の唇は殆んど觸れ合つてゐた。而も彼は、遠くから、ごく遠くから、他の世界からのやうに、彼女を眺めてゐた。見ると、彼女は次第に遠ざかり、霧の中に消えていつた。……次にはもう見えなかつた。その聲も聞えなかつた。彼は一種の快い忘却のうちに陥つてゆき、その中で、音楽のことや、夢想のことや、アーダに無關係な種々のことを考へた。一つの曲調が聞えてきた。彼は靜に作曲に耽つた……あゝ、美しい音楽！……かくも悲しい、堪へ難いまでに悲しい、而もやさしい、可愛い、音楽……あゝ何と快いことか……これだ、これだ……。他は皆眞實のものではなかつた……。

彼は腕を揺られた。一つの聲が叫んでゐた。
「まあどうしたの？　まったく狂人だわ。どうして私をそんなに見てるの？　なぜ返辭をしないのよ？」

彼は自分を眺めてゐる眼をまた見出した。誰なのか！……あゝさうだ……。——彼はほつと息をした。

彼女は彼を観察してゐた。彼が何と考へてるか、知らうとつとめてゐた。彼女には理解が出来なかつた。然しいくらどんなことをしても駄目だと感じた。彼をすつかり手に囚へることが出来なかつた。いつでも彼が逃げ出せる門があつた。彼女はひそかに苛ら立つてゐた。「なぜ泣くの？」と彼女は一度、彼が他の世界へのさういふ旅から戻つてくる時に、彼に尋ねた。

彼は眼に手をやつた。眼が濡れてゐることを知つた。

「僕にも分らない。」と彼は云つた。

「なぜ返辭をしないの？　もう三度も同じことを云つたのよ。」

「一體どういふんだい？」と彼はやさしく尋ねた。

彼女はまた愚にもつかない議論を持ち出した。

彼は倦き／＼してゐる身振をした。

「えゝ、よすわ。」と彼女云はつた。「たゞ一言だけで——
そして益々盛んにやり出した。」

クリストフは怒つて身體を振つた。

六一八

「そんなに汚らばしい話は止してくれ！」

「冗談を云つてるのよ。」

「もつと立派な話の種を探しておいでよ。」

「ぢやあせめて理由を云つてごらんなさい。なぜそれが氣に入らないか云つてごらんなさい。」

「理由があるもんか。なぜ肥料こやしが臭いかには、議論の餘地はない。肥料は臭い、たゞそれつきりだ。僕は鼻をつまんで逃げ出すばかりさ。」

彼は憤然として立ち去つた。そして冷たい空気を呼吸しながら、大膽に歩き廻つた。

然し彼女は、一遍も、二遍も、十遍も、同じことをやりだした。彼の本心を厭がらせ傷けるやうなものなら、何でも議論のうちに取り入れた。

それは全く、人をからかつて面白がる神経衰弱症の娘の、不健全な戯れにすぎないものと、彼は思つてゐた。彼は肩を聳かし、或は聞かない風をした。彼女の言葉を眞面目には取らなかつた。でもやはり、彼女を投げ捨て、しまひたいやうな氣になることもあつた。なぜなら、神経衰弱症と神経衰弱の奴等とは、最も彼の趣味に合はなかつたからである……。

然し彼は十分も彼女と離れてゐればもうすつかり不快なことを忘れてしまふのであつた。さうしては、新しい希望と幻影とを懐いて、アーダの所へ戻つていつた。彼は彼女を愛してゐた。愛は不斷の信仰の行爲である。神が存在しようとするまいとそんなことは殆んど構はない。信するから信するのだ。愛するから愛するのだ。多くの理由を要しない！……

*

*

*

*

クリストフがフォーゲル一家の者と喧嘩をしてからは、その同じ家に住んでることが出来なくなつたので。ルイザは餘儀なく、息子と自分とのために他の住居を探して、其處に移つた。

或る日、クリストフの末弟のエルンストが、ふいに家へ歸つて來た。だいぶ前から消息不明になつてゐたのであつた。彼は何かをやる度毎に、相次いで追ひ出されて、何等の職をも持つてはゐなかつた。財布は空であり、健康は害せられてゐた。それで彼は、一旦古巢へ立ち戻つて、新たに直出すのがいと考へたのであつた。

エルンストは、二人の兄とはどちらとも、仲が悪くなかつた。二人から餘り敬重されては

ぬす、自分でもそれを知つてはゐた。然しそんなことはどうでもいゝことだったので、別に
 怨みもしなかつた。二人も亦彼を憎んではゐなかつた。憎んでも無駄だつたらう。どんなこ
 とを云つてやつても、皆彼から滑り落ちて少しも双が立たなかつた。彼は媚を含んだ美しい
 眼で微笑み、つとめて悔悟の様子を装ひ、他のことを考へ、賞讃し、感謝し、そしてしまひに
 はいつも、兄のどちらかから金を搾り取つてゐた。クリストフは心ならずも、この道化た愛
 嬌者に愛情を懐いてゐた。彼の顔立は、クリストフと同じく、否より以上に、父のメルキオ
 ルに似てゐた。クリストフ同様に脊が高く頑丈であつて、整つた顔付、淡懷な様子、澄んだ
 眼、眞直な鼻、にこやかな口、美しい齒、愛相のいゝ態度、を持つてゐた。クリストフは彼
 を見ると、心が解けてしまつて、前から用意して置いた叱責も半分しか云へなかつた。自分
 と同じ血を分け、少くとも容姿の點では自分の名譽となる、その美しい少年に對して、クリ
 ストフは本來、一種親愛の情を感じてゐた。悪い奴だとは思つてゐなかつた。それにエルン
 ストは、決して馬鹿ではなかつた。教養はなかつたが、才智がないのではなかつた。精神的
 の事柄に興味を覺え得ないのでもなかつた。音楽を聞くと愉快を感じてゐた。兄の音楽を理
 解してはゐなかつたが、それを物珍らしさうに聽いてゐた。クリストフは、家の者等の同情
 に甘やかされたことがなかつたので、自分の音樂會に弟の姿を見付けるといつも喜んでゐ
 た。

然しエルンストの主な才能は、二人の兄の性質を知りぬいてることゝ、二人を巧みにあや
 なすことゝであつた。クリストフは、エルンストの利己心と無情さとを、彼は必要な時にし
 か母と自分とのことを考へないといふことを、徒らに知つてゐるばかりで、いつもその愛情を
 含んだ素振に陥れられて、何事でも拒むことは滅多になかつた。クリストフは彼の方を、も
 一人の弟のロドルフよりもずつと好んでゐた。ロドルフは、端正謹直で、事務に勉勵し、徳
 義心が強く、金を求めることもなく、また金を與へることもなく、日曜日毎には几帳面に母
 に逢ひに来、一時間留つて、自分のことばかり饒舌り、勝手な熱を吹き、自分の家やまた自
 分に關することは何でも自慢をし、他人のことは尋ねもせず、また興味も覺えず、そして時
 間が鳴ると、義務を果したことに満足して、立ち去つてゆくのであつた。こんな人物をこそ
 クリストフは我慢が出来なかつた。ロドルフが来る時間には、外出するやうにしてゐた。ロ
 ドルフはクリストフを妬んでゐた。彼は藝術家を凡て輕蔑してゐて、クリストフの成功を苦
 にしてゐた。それでも彼は、自分の出入する商人間に於て、クリストフの一寸した好評を利
 用せずにはおかなかつた。然し嘗て、母にもクリストフにも、それを一言も洩したことがな
 かつた。彼はその好評を知らないやうな風をしてゐた。それに引代へ、クリストフに起つた

不快な出来事は、些細なことまでも皆知つてゐた。クリストフはさういふ下らなさを輕蔑して、更に氣付かない風を装つてゐた。然し、クリストフがもし知つたら平氣で居られなかつたらうと思はれることは、クリストフが嘗て思つてもみなかつたことは、彼に不利なロドルフの知識の一部分は、エルンストから來たものであつたといふことである。この狡猾な少年は、クリストフとロドルフとの違ひをよく見分けてゐた。勿論、クリストフの優れてゐることはよく認めてゐたし、彼の廉潔さに對して多少皮肉な一種の同情は懷いてゐたらしい。然し彼はそれを利用することを憚らなかつた。また、ロドルフの悪い感情を輕蔑しながらも、それに卑屈にも乗じてゐた。その虚榮心や嫉妬心に諛ひ、その冷遇をおとなしく甘受し、町の醜聞を一々告げ知らせ、殊にクリストフに關する醜聞を報告してゐた——そんな話なら彼はいつでも不思議なほどよく知つてゐた。そして彼はまんまと目的を達した。ロドルフは吝嗇にも拘らず、クリストフと同様に、エルンストから騙し取られてゐた。

斯くてエルンストは、公平に二人を利用し愚弄してゐた。また二人共彼を愛してゐた。

*

* 一

*

*

エルンストは日頃の狡猾にも拘らず、母の所へ姿を現はした時には、氣の毒な様子をしてゐた。彼はムニッヒからやつて來たのだつた。其處で彼は最後の地位を見つけ出したが、例の通りすぐに逐ひ拂はれてしまつた。篠つく雨に打たれたり、何處とも知れぬ處に臥したりしながら、大半の道程を歩かなければならなかつた。泥にまみれ、着物は裂け、乞食のやうな風をし、また痛々しい咳をしてゐた。途中で悪い氣管支炎に罹つたのである。彼がはひつて來るのを見ると、ルイザは心顛倒してしまひ、クリストフは感動して駆け寄つた。エルンストは涙脆かつたし、その場の効果に乗じないではおかなかつた。そして皆が感情に驅られた。三人共互に抱き合つて泣いた。

クリストフは自分の室を與へた。寢床を温められ、病人は其處に寝かされたが、もう死にかけてるかと思はれた。ルイザとクリストフとは、その枕頭につき添つて、交代に看護をした。醫者、藥劑、室内の十分な火、特別の食物、などが必要だつた。

その次にはまた、足から頭までの服装を心配してやらなければならなかつた。襦袢、靴、服、すつかり新しくしてやらなければならなかつた。エルンストはされるまゝに任してゐた。ルイザとクリストフとは、その費用を償ふために、血の汗を流して働いた。二人はその當座、非常に困窮した。新たに家具を整へたし、住居は前と同じく不便でありながら借賃が高か

つたし、クリストフには出稽古の口が減つてゐたし、費用は嵩んでゐた。辛うじてやりくりをしてるだけだつた。二人は出来る限りの手段を盡した。勿論クリストフは、自分よりもよくエルンストを助け得るやうな身分に在るロドルフに、頼み込むことも出来る筈だつた。然し彼はそれを欲しなかつた。獨力で弟を救はなければ名譽に關はると考へてゐた。彼は自分に救ふ責任があると思つてゐた、兄としての資格から云つて——またクリストフたるべき所から云つても。彼は恥しさに顔を赤らめながら、二週間前には怒つて拒絶した仕事を——或る富有な匿名の好事家があつて、樂曲を一つ買ひ取つて自分の名前で發表したいといふのを、その仲介者がクリストフの所に申込んできたのであつたが、その申込みを引受け、こちらから頼みに行かなければならなかつた。ルイザは日雇ひに雇はれていつて、衣類を繕つた。二人共互に犠牲を隠し合つてゐた。家へ持つて歸る金については、嘘を云ひ合つてゐた。エルンストは病後に、煖爐の隅に蹲りながら、或る日、激しい咳の間々に、多少の借金があることをうち明けた。でそれも支拂はれた。誰も彼に小言一つ云はなかつた。病人に對して、悔悟して戻つて來た放蕩息子に對して、小言を云ふのは深切な處置とは云へないのだから。そしてエルンストは、艱難のために人が變つたかと思はれるやうだつた。彼は涙聲で、過去の過ちを述べた。ルイザは彼を抱擁しながら、もうそんなことを考へてくれるなど

頼んだ。彼は元來甘えつ兒だつた。愛情をぶちまけてはいつも母に取り入つてゐた。昔クリストフはそれを多少妬んだものだつた。然し今では、最も年下で最も弱い子がまた最も愛せられるのを、當然だと思つてゐた。彼自身も、大して年齢が違はないにも拘らず、エルンストを弟といふよりも寧ろ、殆んど息子のやうに見做してゐた。エルンストは彼に非常な尊敬を示してゐた。時には、クリストフが負擔してゐる重荷のこと、金の不自由を忍んでること……などをそれとなく云ひ出してみることもあつた。然しクリストフは、言葉を續けさせなかつた。そしてエルンストは、卑下した愛深い眼付で、たゞそれを認定するだけにしておいた。彼はクリストフが興へる助言に賛成した。健康が回復したら、生活を一變して、眞面目に働くつもりでゐるらしかつた。

彼は恢復しかけてゐた。然し豫後は長かつた。彼の濫用された健康には養生が肝要だと、醫者は明言した。それで彼は引續いて、母の許に留まり、クリストフと床を分ち、兄が稼ぎ出してくれる麵麩や、ルイザが彼のために工夫して拵へてくれる一寸した御馳走を、旨さうに食べてゐた。立ち去るなど、は口にも出さなかつた。ルイザとクリストフも、そのことを彼に云はなかつた。彼等は、可愛い、息子を、可愛い、弟を見出して大變嬉しがつてゐた。クリストフは、エルンストと長い夜々を一緒に過してゐるうちに、次第に親しい話をもする

やうになつた。彼は誰かに心の中をうち明けたがつてゐた。エルンストは伶俐だつた。機敏な頭を持つてゐて、半ば云ひさした言葉の端をきいたゞけで、凡てを悟つた——もしくは悟るらしかつた。彼と話すのは愉快だつた。けれどもクリストフは、最も心に懸つてゐることは、自分の戀愛のことは、一言も云ひ出し得かつた。一種の羞恥心に引止められた。エルンストはすつかり知つてゐたが、それを少しも外に表はさなかつた。

或る日、すつかり全快したエルンストは、快晴の午後に乗じて、ライン河のほとりをぶらついた。町から少し外へ出て、或る騒々しい飲食店の前を通りかゝると、丁度日曜のことゝて、多くの人がやつて来て踊つたり飲んだりしてゐたが、その中に、大騒ぎをしてゐるアーダやミルハと一緒に食卓についてゐる、クリストフの姿が見えた。クリストフも彼の姿を見て、顔を赤らめた。エルンストは謹み深い風をして、クリストフに近寄らずに通り返した。

クリストフはその出會に大變困つた。そのために、如何なる連中に自分は立ち交つてゐるかが、更に強く感じられた。そして、さういふ所を弟に見られたのが、心苦しかつた。なぜなら、以後はエルンストの品行を批判するの権利を失つたばかりではなく、また、兄としての義務について、極めて高い、極めて素朴な、多少舊弊な、そして多くの人には滑稽に思はれるかも知れないほどの、一の觀念を持つてゐたからである。自分のやうにその義務を缺くと、自

分自身の眼にも自ら墮落することになると、彼は考へてゐた。

その晩、一緒に居室に二人落ち合つた時彼は、晝間の出来事をエルンストが暗に云ひ出しでくれるのを待つた。然しエルンストは慎重に黙つてゐて、彼もやはり待つてゐた。すると、二人共着物をぬいでるうちに、クリストフは自分の戀愛をうち明けようと決心した。彼はおどおどしてエルンストの方を眺め得なかつた。そして氣恥しさの餘り、殊更に亂暴な云ひ方をした。エルンストは少しも助けてくれなかつた。ちつと口を噤んでゐて、やはり彼の方を眺めなかつた。それでも彼の様子を見て取つてゐた。クリストフの拙劣さや不器用な言葉などが如何に滑稽であるかを、少しも見落さなかつた。クリストフは思ひ切つてアーダを名指すのも、容易ではなかつた。そして彼の描き出すアーダの姿は、あらゆる戀人にどれにでもよくあてはまるやうなものだつた。それでも彼は自分の戀愛を語つた。そして、心に満ちてゐる情愛の波に、次第に我を忘れてきた。愛することは如何にいふことであるか、闇夜のやうな生活の中でその光明に出逢はないうちは、如何に自分は惨めであつたか、やさしい深い戀愛がなかつたら、如何に人生はつまらないものであるか、さういふことを彼は語つた。相手は眞面目くさつて耳を傾けてゐた。程よく答へて、少しも尋ねはしなかつた。然し感動したその握手は、クリストフと同様に感じてることを示した。二人は戀愛と人生とに關して意

見を交換した。クリストフは至つてよく了解せられたことを喜んだ。二人は眠る前に、親しく抱擁しあつた。

六二八

クリストフは、多くの氣兼と遠慮とを以てはあつたが、自分の戀愛をエルンストにうち明ける習慣になつた。エルンストの憤み深さは、彼を安心させてゐた。アーダに關する不安をも、彼はそれとなく知らせた。然し彼は嘗て彼女を咎めなかつた。自分自身を咎めてゐた。そして、眼に涙を浮べながら、アーダを失ふやうなことがあつたらもう生きては居れないだらうと云つた。

彼はエルンストのことをアーダに話すのをも忘れなかつた。そして彼の伶俐と美貌とをいつもほめてゐた。

エルンストは、アーダに紹介してくれとは、クリストフに進んで申し出なかつた。自分の知つてる者は誰も居ないと云ひながら、憂はしげに室に閉ぢ籠つて、出かけることを肯じなかつた。クリストフは日曜日に、弟が家に残つてるのに、アーダとなほ野外遊歩を續けてやつてるのを、自ら咎めてゐた。それでも、戀人と二人つきりにならないと苦しかつた。然し自分の利己主義もやましかつた。そして彼は、エルンストにも一緒に來ないかと誘つた。紹介は、アーダの室の入口で、階段の上り口で、爲された。エルンストとアーダとは、い

と鄭重に挨拶を交した。アーダは、いつもつきつきのミルハを従へて、外に出て來た。ミルハはエルンストを見ると、一寸驚きの聲を發した。エルンストは微笑み、近寄つてゆき、ミルハを抱擁した。ミルハはそれを當然だと思つてるらしかつた。

「なんだ、お前達は知つてるのかい？」とクリストフは呆氣に取られて尋ねた。

「勿論だわ。」とミルハは笑ひながら云つた。

「何時から？」

「ずつと前からだわ。」

「そしてお前も知つてたのかい？」とクリストフはアーダに尋ねた。「なぜさう云はなかつたんだい？」

「ミルハさんの情人ならみんな私が知つてるだけでも、あなたは思つてるのね。」とアーダは肩を聳かしながら云つた。

ミルハはその情人といふ言葉尻を捉へて、冗談に怒つた風をした。クリストフはそれ以上何にも知り得なかつた。彼は鬱ぎ込んだ。エルンストも、ミルハも、アーダも、皆卒直さを缺いでるやうに彼には思へた。それかと云つて、實を云へば、彼等には何等嘘を咎むべき點もなかつた。然し、アーダに對しては何の祕密も持たないミルハが、そのことだけを隠し立

てしてゐやうとは、信じ難かつたし、エルンストとアーダとが今迄互に知らなかつたとは、信じ難かつた。クリストフは二人の様子を窺つた。然し二人は平凡な言葉を少し交はしただけだつた。そしてエルンストは散歩の間中、もうミルハにしか取合はなかつた。アーダの方でも、クリストフにしか話しかけなかつた。彼女は彼に對して、いつもよりずつと愛相がよかつた。

それ以來、エルンストはいつも彼等の仲間に加はつた。クリストフは彼を除外したかつたが、敢て口には云ひ出せなかつた。弟を遠ざけたいのは、彼を遊び仲間にする事の恥しさ以外に、他に理由があるのではなかつた。クリストフは疑惑を懐いてはしなかつた。エルンストは何等疑惑の種をも與へなかつた。彼はミルハに熱中してゐるらしかつた。そしてアーダに對しては、丁寧な遠慮を守り、殆んど不相應な敬遠をさへ事としてゐた。宛も、兄に示す尊敬の一部を、兄の情婦へも移さんとしてゐるがやうだつた。アーダはそれを別に怪しまなかつた。そして自分でも同じく用心をしてゐた。

彼等と一緒に長い散歩をした。兄弟二人は先に進み、アーダとミルハとは笑ひ囁きながら、數歩後からついて行つた。彼女等はよく道の眞中に立ち止つては、長い間饒舌り合つた。クリストフとエルンストも亦立ち止つて二人を待つた。しまひにクリストフは焦つたくなつ

て、また歩き出した。然し彼は二人のお饒舌女を相手にエルンストが談笑してゐるのを聞くと、不快になつてすぐに振り向いた。彼等が何を云つてゐるのか知りたかつた。でも皆が彼に追付く時には、もう話は止んでゐた。

「みんなで何時も何を相談し合つてゐるんだい？」と彼は尋ねた。

彼等は冗談を云つてそれに答へた。三人は市場泥坊のやうに、互に諜し合してゐた。

*

*

*

*

クリストフは先刻、アーダと可なり激しい口論をしたばかりの所だつた。その日は朝から二人でぶつ／＼云ひ合つてゐた。アーダは、さういふ場合にはいつも、意趣晴しをするために出来るだけ堪らない厭な風を見せつけながら、傲慢なむつとした様子をするのであつたが、その時は珍らしくもさうではなかつた。此度に限つて彼女は、單にクリストフの存在を知らないやうな風をして、他の二人の連れを相手に如何にも上機嫌に振舞つてゐた。心ではその諍いさかひを別に怒つてもゐないかのやうだつた。

之に反してクリストフは、非常に仲直りをしたがつてゐた。嘗て見ないほど熱中しきつて

わた。二人の戀愛の恩恵に對する感謝の情、馬鹿げた口論で時間を浪費した後悔の念、——また理由もない懸念、この戀愛も終りに近づいてるといふ妙な考へ、さういふものが彼の愛情につけ加はつてゐた。彼は愁はしげに、アーダの美しい顔を眺めた。その顔は、彼の方を少しも見ないやうな風を装つて、他の者と笑ひ戯れてゐた。その顔はなつかしい思ひ出や、深い愛や、誠實な親しみを、彼のうちに多く呼び起させるのであつた。——そのあでやかな顔は、時々——（この時もさうだつたが）——多くの深切と如何にも純潔な微笑とを浮べることさへあつて、そんな時クリストフは、なぜ二人の間がもつとましくゆかないのか、なぜ二人は自分達の幸福を喜んで害してゐるのか、なぜ彼女は、光輝ある時間を忘れようとしてゐるのか、それを怪しむのであつた。——二人の愛情の清らかさを、たとひ頭の中に於てにしる、濁らしたり汚したりして、如何に不思議な満足を彼女は見出し得てるのか？ クリストフは、自分の愛するものを信じたいといふ、非常な欲求を感じてゐた。そして更にも一度自ら幻を描かうとつとめた。彼は自分が正しくないのを自責し、また彼女を種々邪推したこともや、自分に寛大な心が缺けてゐたことを、後悔してゐた。

彼はアーダに近寄つた。話しかけようとしてつとめた。が彼女は、たゞ二三言冷かな言葉を返

した。少しも彼と仲直りしたいと思つてはゐなかつたのである。彼はせがんだ。一寸他の者から離れて自分の云ふことを聞いてくれと、その耳に囁いた。彼女は可なり不愛相な様子でついて來た。二人がだいぶわきに外れて、ミルハからもエルンストからも見られない處まで來ると、彼は俄に彼女の手を取り、許しを乞ひ、林の中の枯葉の間に、彼女の前に跪いた。こんなに仲違ひしたまゝではもう生きて居れない、と彼は云つた。もう散歩を楽しむことも麗はしい天氣を喜ぶことも出来ない。もう何物も楽しめない。彼女から嫌はれてると知つては、もう呼吸することも出来ない。彼女から愛して貰ひたいのだつた。なるほど彼は、正しくないことも屢々あり、亂暴で不快であることもあつた。彼は彼女に許しを懇願した。罪は彼の愛そのものに在つたのだ。彼女のうちに何か凡庸なものがあることを、二人のなつかしい過去の思ひ出やまた彼女自身に、全くふさはしいものでなければ何物も、堪へ忍ぶことが出来なかつたのだ。彼は過去の思ひ出を、最初の邂逅や一緒に過した初めの日々を、彼女に思ひ起させた。何時も變らず彼女を愛してゐるし、永久に愛するだらう、と彼は云つた。どうか捨てゝくれるな！ 自分にとつては彼女が凡てである……。

アーダは、彼の言葉に耳を傾けながら、微笑みを浮べ、落着を失ひ、殆んど感動してゐた。彼女は彼にやさしい眼をしてやつた。互に愛してゐてもう怒つてはゐないと告げる眼だつ

た。二人に抱擁し合つた。そして寄り添ひながら、落葉した林の中を歩いて行つた。彼女はクリストフを可愛いと思ひ、彼のやさしい言葉に満足してゐた。それかと云つて彼女は、頭に考へてゐた悪い思ひ付を捨てはしなかつた。でもさすがに躊躇され、もう先刻ほど氣が進まなかつた。それでもやはり計畫通りを實行した。なぜか？ それを誰が云ひ得よう。…先刻自ら實行を誓つたからであるか？…そんなことが誰に分るものか。恐らくは、自分が自由であるといふことを、戀人に證明してやり、自分自身に證明してやるために、彼を欺くのが、その日は殊に面白く思へたのかも知れなかつた。彼女はそれで戀人を失ふとは考へてゐなかつた。失ひたがつてはゐなかつた。最も確かに戀人を囚へると信じてゐた。

一同は森の中の木立粗らな處に到着した。其處から二つの小路が分れてゐた。クリストフは一方の路を取つた。エルンストは、目的の丘の頂へは他方の路の方が早く着ける、と云ひ出した。アーダも同じ意見だつた。クリストフは、度々來て道をよく知つてゐたので、二人は間違つてると主張した。彼等はどちらも譲らなかつた。そして試してみようといふことになつた。各自に自分の方が眞先に着くと誓つた。アーダはエルンストと一緒に出かけた。ミルハはクリストフに隨つた。彼女は彼の方が本當だと信じてゐるらしい風をしてゐた。そして「いつもの通りだわ」と一言つけ加へた。クリストフは戯れを本氣に取つてゐた。そして負

けるのが嫌ひだつたから、足早に、ミルハが困る位早く、歩き出した。ミルハは彼ほど急いで少しもゐなかつた。

「まあそんなに急ぐことはないわ。」と彼女は例の皮肉な落着いた調子で云つた。「私達が先に着くにきまつてよ。」

彼は或る懸念に囚へられた。

「なるほど。」と彼は云つた。「少し早く歩きすぎるやうだ。冗談ぢやない。」

彼は足をゆるめた。

「だが僕は知つてる。」と彼は續けて云つた。「向うでは確かに、先に着くために駈けてるよ。」

ミルハは笑ひ出した。

「いえ、心配しなくつてもいゝわ！」

彼女は彼の腕にぶら下り、彼にしかと寄り添つてゐた。クリストフより少し脊が低いので、歩きながら、その伶俐な甘えた眼で彼の方を見上げてゐた。彼女は全く綺麗で誘惑的だつた。彼は彼女を見忘れたやうな氣がした。彼女くらの變り易い者はなかつた。普通の時には少し蒼ざめた肌ればつたい顔をしてゐたが、一寸した興奮や、楽しい考へや、或は人の機嫌を取りたい心が起ると、それだけでもう、お婆さんじみた様子が無くなり、頬には赤味がさし、

眼の下やまはりの眼瞼の皺が消え、眼付に光りを帯び、そして顔立全體に、アーダの顔に見られないやうな青春と活氣と機智とが、浮んでくるのであつた。クリストフはその變化に驚いた。彼は彼女の眼から自分の眼を外らした。彼女と二人きりなのが少し不安だつた。彼女が煩はしかつた。彼女の云つてゐることに耳を傾けず、返辭をせず、或はでたらめの返辭をした。彼はアーダのことだけを考へてゐた——考へたかつた。アーダが先刻見せたやさしい眼、その微笑、その接吻、などのことを考へてゐた。そして彼の心は戀しさで一杯になつてゐた。ミルハは、清らかな空に細い小枝を伸してゐる林の景色が如何に美しいかを、彼に見とれさせたがつてゐた。……さうだ、凡てが美しかつた。雲は散り失せてゐた。アーダは彼の手に戻つてゐた。彼は二人の間の氷を砕くことが出来たのであつた。二人はまた愛し合つてゐた。互に側に居やうと離れてゐやうと、もはや一體に過ぎなかつた。彼は安堵の息をついつてゐた。如何に空氣も輕やかだつたことか！ アーダが彼に戻つて來たのだ……。凡てが彼に彼女のことを想はせた。……少し天氣が濕つぽかつた。彼女は寒くはないだらうか？……美しい木立に白く霜が置いてゐた。彼女が今それを見ないのは如何にも残念だ。……然し彼は勝負のことを思ひ出した。そして足を早めた。道を間違へまいと用心してゐた。目的地に着くと、彼は意氣揚々として云つた。

「僕等が先だ！」

彼は嬉しさうに帽子を振つた。ミルハは微笑みながら彼を眺めてゐた。

二人が立つてゐる場所は、木立の間の長い峻しい岩だつた。緑には榛といちけた小徑とが茂つてゐる、頂上の平地から見下すと、木立のある斜面や、紫色の靄に包まれた縦の梢や、青とした谷間を流れるライン河の長い帯が見えてゐた。小鳥の聲もしなかつた。人聲もしなかつた。そよとの風もなかつた。どんよりした太陽の蒼白い光りに寒げに温まつてゐる、しみんと静まり返つた冬の日であつた。遠くには時々、汽車の短い汽笛が谷間に響いてゐた。クリストフは岩の端に立つて、その景色を眺め入つてゐた。ミルハはクリストフを眺め入つてゐた。

彼は機嫌のいい様子で彼女の方へ振り向いた。

「どうだ、怠惰者達だなあ、僕が云つてやつた通りだ！……よし、待つてゝやれ……。」

彼は龜裂のはひつた地面の上に、日向に寝そべつた。

「さうよ、待つてませう……。」「とミルハは帽子を脱ぎながら云つた。

彼女の口調には、如何にも嘲り氣味が籠つてゐたので、彼は身を起して彼女を眺めた。「どうなすつたの？」と彼女は平然として尋ねた。

「今何と云つたんだい？」

「待つてませうと云つたのよ。あんなに早く私を歩かせるには及ばなかつたでせう。」

「さうだね。」

彼等は凸凹した地面の上に、二人共寝轉んで待つた。ミルハは或る節を口ずさんでゐた。クリストフは二三の樂句を低く歌つてゐた。然し彼は絶えずそれを途切らしては耳を傾けた。

「足音が聞えるやうだ。」

ミルハは歌ひ續けてゐた。

「一寸黙つておくれ。」

ミルハは口を噤んだ。

「いや、何でもなかつた。」

彼女をまた歌ひ出した。

クリストフはもうぢつとして居れなかつた。

「道に迷つたのかも知れない。」

「迷つたんですつて？ 迷ふ筈がないわ。エルンストさんはどの道でも知つてるから。」

をかした考へがクリストフの頭に浮んだ。

「向うが先に着いて、僕達が來ない前に此處から出かけたんぢやないかしら。」

ミルハは仰向に寝そべり、空を見ながら、歌の途中で、俄に狂人のやうに笑ひ出し、息もとまるほどだつた。クリストフは云ひ張つた。彼等は停車場へもう行つてゐるに違ひないと云つて、其處へ下りてゆきたがつた。ミルハはとう／＼起き上つた。

「そんなことをすれば却つてはぐれてしまふだけだわ。……停車場のことなんか何の話もなかつたわ。此處で落合ふことになつてたんぢやないの。」

彼はまた彼女の側に坐つた。彼女は彼が待ちくたびれてゐるのを面白がつてゐた。彼は自分を見守つてゐる彼女の皮肉な眼付を感じた。彼は眞面目に心配しだした——彼等二人のために心配しだした。彼等を疑つてはゐなかつた。彼はまた立ち上つた。林の中に戻つてゆき、彼等を探し、彼等と呼んでみよう、と云ひだした。ミルハはくすりと笑つた。彼女はポケットから、針と鋏と糸とを取出してゐた。そして帽子の羽毛を、落着き拂つて解いたり縫つたりしてゐた。終日其處に坐つてゐつもりらしかつた。

「駄目よ、駄目よ、お馬鹿さんね。」と彼女は云つた。「もしあの人達が此處へ來るとしても、二人つきりなら來やしないと、あなたは思はなくつて？」

六四〇
彼ははつと思つた。彼女の方を眺めた。彼女は彼を見ないで、仕事に氣を入れてゐた。彼はその側に寄つた。

「ミルハ！」と彼は云つた。

「え？」と彼女は仕事を止めずに云つた。

彼は跪いて、彼女をすぐ側から眺めた。

「ミルハ！」と彼はくり返した。

「なによ？」と彼女は尋ねながら、仕事から眼を挙げ、微笑んで彼を眺めた。「どうしたの？」

彼女は彼の狼狽した顔付を見ながら、嘲るやうな表情をした。

「ミルハ！」と彼は喉をひきつらしながら尋ねた、「思つてることを云つてくれ……。」

彼女は肩を聳かし、微笑み、そしてまた仕事にかゝつた。

彼は彼女の手を取り、縫つてる帽子を取り上げた。

「こんなことは止してくれ、止してくれ、そして僕に云つてくれよ……。」

彼女は彼を正面まへにちつと見た、そして待つた。クリストフの唇の震へてるのが眼についた。「お前は、」と彼はごく低く云つた、「エルンストとアーダとの間が……。」

彼女は微笑んだ。

「固こよりだわ！」

彼は憤激してきつとなつた。

「いや、いや、そんな筈はない！ お前だつてさう思つてるんじゃないだらう……嘘だ、嘘だ！」

彼女は彼の兩肩に手を置いて、笑ひこけた。

「あなたは馬鹿ね、ほんとにお馬鹿さんだわ。」

彼は激しく彼女を揺つた。

「笑ふなよ。なぜ笑ふんだい？ 本當だとしたら笑ひ事ぢやない。お前はエルンストを愛してるぢやないか……。」

彼女は笑ひ續けた。そして彼を引寄せながら、彼を抱擁した。彼は我知らず、接吻を與へた。然し、自分の唇の上に、まだ兄弟の接吻の熱がさめないその唇を感じた時、彼はつと身を引き、彼女の顔を少し押し離した。彼は尋ねた。

「お前は知つてたのか？ 皆で謀しよし合したのか？」

彼女は笑ひながら「え、」と云つた。

クリストフは聲も立てなかつた。憤怒の身振もしなかつた。もう息も出来ないかのやうに口を開いた。眼を閉ぢて、両手で自分の胸を押へつけた。心臓が裂けさうだつた。それから地面に横はり、両手で頭を抱へた。彼は子供の時のやうに、嫌悪と絶望の發作に打たれた。餘りやさしくなかつたミルハも、彼を氣の毒に思つた。彼女は自然と親愛な憐れみの情に驅られ、彼の上に身を屈め、やさしい言葉をかけ、また、鹽劑の塵を嗅がせようとした。然し彼は、彼女を嫌つて押しつけ、彼女が怖がつたほど俄に立ち上つた。彼には復讐の力も欲求もなかつた。苦悶に引きつゝた顔で彼女を眺めた。

「恥知らずめが、」と彼は絶望の底から云つた、「お前は自分でどんなひどいことをしてるかよく知るまい……。」

彼女は彼を引止めようとした。然し彼は、それらの破廉恥な行ひや、泥のやうな心の奴等や、彼等が自分を陥れようとした不倫な共愛などを、嫌悪の情で唾棄しながら、林の間を逃げていつた。彼は涙を流し、身を震はし、嫌悪の念に咽びあげてゐた。彼女を、彼等皆を、自分自身を、自分の身體を、自分の心を、嫌悪してゐた。輕侮の暴風が彼のうちに荒れてゐた。その暴風は久しい前から準備されたものであつた。低級な思想、卑しい和解、また彼が數ヶ月來住んでゐた腐爛空粗な雰圍氣、などに對しては早晚、反動が來るべきであつた。然

し愛したい要求は、愛するものに幻をかけた要求は、その危機を出来るだけ遅らしてゐた。所が今危機は一舉にして到來した。その方が却つてよかつた。空氣と峻烈な純潔との大風が、氷の如き朔風が、害毒の氣を吹き拂つた。嫌悪の情は、一撃の下に、アーダに對する戀愛を滅してしまつた。

アーダはその仕業によつて、クリストフに對する支配權を、更に鞏固にうち建て得ることと信じてはゐたが、それは此度もまた、愛してくれる男に對する粗雑な不理解を、證明するばかりだつた。汚れた心を繋ぎ得る嫉妬の情も、クリストフのやうな若い驕慢な純潔な性情には、たゞ反撥せしむるを得るのみだつた。然し、彼が殊に許し得なかつたことには、斷じて許し得なかつたことには、その裏切りの行爲はアーダに在つては、情熱から來たものではなく、また、女の理性が大抵は屈服しがちな、不條理下劣で而も往々不可抗な出來心、その一つでも殆んどなかつた。否——彼は今や了解した——それは彼女に在つては、彼を墮落させ、彼を恥しめ、彼の堅固な道德心や嚴酷な信念などを罰し、彼を自分と同じ水平面に低下さし、彼を自分の足下に跪かせ、自分の害毒の力を自ら承認しようといふ、ひそかな欲望であつた。そして彼は嫌悪の念を以て自ら尋ねた、だが多くの者のうちに在る汚さんとするこの欲求は——自分や他人のうちの純潔なものを汚さんとするこの欲求は、一體何であるの

か？——表皮の全面にもはや一點の清い場所も残つてゐない時初めて幸福を感じ、汚穢の中に轉つて快樂を味つてゐる、それらの豚のやうな魂は！……

六四四

アーダは、クリストフが手許に戻つてくるのを、二日ばかり待つてみた。それから氣を揉みだして、甘つたるい手紙を書き送つた。勿論あの出来事については何にも言及しなかつた。クリストフは返事も寄來さなかつた。彼は言葉にも盡せないほどの深い憎悪で、アーダを憎んでゐた。彼は自分の生活から彼女を抹殺してゐた。彼にとつては、もはや彼女は存在してゐなかつた。

* * *

クリストフはアーダから解放されてゐた。然し自分自分から解放されてはゐなかつた。自ら心を外らさうとつとめ、過去の清淨強健な靜安さに歸らうとつとめても、その甲斐がなかつた。人は過去に戻り得るものではない。道を進み続けなければならぬ。如何にふり返つても、眼にはひるものはたゞ、通り過ぎて來た場所が、嘗て眠つた家の遠い煙が、記憶の霧の中

中に、地平線に隠れてゆくばかりで、何の役にも立たない。然し情熱に驅られた數ヶ月位、人を昔の魂から遠く引離すものはない。道は急に曲り、景色は變る。自分の後に残してゆくものに、最後の別れを告げるやうなものである。

クリストフは、その別れに同意することが出来なかつた。彼は過去に向つて腕を差出してゐた。昔の孤獨な忍諦の魂を、復活させようと固執してゐた。然しその魂はもはや存在してゐなかつた。情熱が齎す多くの廢墟こそ、情熱それ自身よりもずつと危険である。クリストフはたゞ徒らに、もう愛すまいとし、戀愛を——暫くの間——輕蔑しようとするばかりだつた。彼は戀愛の爪痕を受けてゐた。心の中に一の空虚があつて、それを滿さなければならなかつた。然し、一度味つたことのある者を焼きつくすやうな、情愛と快樂とのこの恐ろしい要求の代りに、たとひ反對のものでいいから何か他の熱情が必要だつた、輕蔑の熱情、驕慢な純潔の熱情、徳操の信念の熱情でも。——然しそれらのものでもやはり足りなかつた。もはや彼の饑ゑを癒すに足りなかつた。それはたゞ一時の食料に過ぎなかつた。彼の生活は、急激な反動の連続——極端から極端への飛躍の連続であつた。或は、超人間的禁慾主義の規矩に生活を押し込まうとした。そしてもはや物を食はず、水を飲み、歩行や苦業や不眠で身體を痛めつけ、あらゆる楽しみを自ら禁じた。或は、自分のやうな者には力が眞の道

六四六
徳であると思ひ込んだ。そして快樂の追求に耽つた。然し何れの場合に於ても、彼は不幸であつた。彼はもはや一人ではゐられなかつた。また、もはや一人でゐずにはをられなかつた。

彼に對する唯一の救済の途は、眞の友情を——恐らくはローザの友情を、見出すことであつたらう。彼はその中に身を遁れることが出来たであらう。然し兩家族は全くの不和になつてゐた。もはや互に顔を合せることもなかつた。たゞ一度、クリストフはローザに出逢つた。彼女は彌撒から出て来る所だつた。彼は彼女に近寄るのを躊躇した。彼女の方は、彼の姿を見ると、やつて來ようとする様子をした。然し彼が遂に、石段を下りてゐる信者達の人波を分けて、彼女に近づかうとすると、彼女は眼を外らした。彼が側まで行くと、彼女は冷かに挨拶をして、そのまま通り過ぎた。彼はその若い娘の心の中に、強い冷酷な輕蔑の念があるのを感じた。彼女がやはり自分を愛してゐて、それをうち明けようと望んでは、彼は感じなかつた。彼女はその愛を、罪過か又は無分別かでもあるやうに、自ら咎めてゐた。クリストフを不良で墮落してると信じ、益々自分と縁遠いものであると信じてゐた。かくて二人は互に永久に取失つた。そしてそれは、どちらにとつても、却つていゝことだつたらう。彼女は善良ではあつたが、彼を理解するには十分の生活力がなかつた。彼は愛情と尊重

とを欲しがつてはゐたが、喜びも苦しみも空氣もない閉ぢ籠つた凡庸な生活では、息がつけなかつた。で二人は苦しむことになるわけだつた。二人共互に苦しませるのを苦しむことになるわけだつた。それで結局、二人を距てた不運は、往々あるやうに——常にあるやうに、強壯忍耐な者にとつては、恐らく幸運となるのであつた。

然し當座の間、それは二人にとつては大きな悲しみと不幸とであつた。殊にクリストフにとつてさうだつた。時としては、最も多く知力を具へた者から知力を全部奪ひ去り、最も善良な者から善良さを全部奪ひ去るかの觀がある、その假借なき德操、その狭小な心は、彼を苛ら立たせ、彼を傷つけ、反撥心によつて彼をより放恣な生活に投げ入れたのである。

クリストフは、アーダと共に近郊の酒場をぶらついてゐるうちに、數人の面白い若者——浮浪者等と知り合ひになつてゐた。彼等のやり口の呑氣さと自由さとは、彼に不快でもなかつた。その一人のフリーデマンといふのは、彼と同じく音楽家で、三十歳前後のオルガン手であつて、才智もあり、自分の職務にも堪能だつた。然し殆んど救ふ可らざる怠惰者で、その凡庸な域を脱するために少しでも努力をするより寧ろ、餓死か渴き死かする方を好むほどだつた。そして醜態と生活してゐる人々の悪口を云ひながら、自ら懶惰を慰めてゐた。その多少重々しい皮肉な冗談は、人を笑はせずにはおかなかつた。彼は仲間の者等よりずつと放膽で、

地位ある人々をけなすのを——やはり目配せや隠密な言葉でおづ／＼とではあつたが——少しも憚らなかつた。音楽の方面では、世の定説に少しも従はず、また當代の偉人等が恣にしてゐる名聲を、狡猾に罵倒することも出来た。女は彼の前では更に容赦されなかつた。或る女嫌ひな僧侶の古い言葉で、當時クリストフが誰よりもよくその辛辣さを味ひ得た一句を、好んで冗談に持ち出してゐた。

——女は靈の死滅なり。

クリストフは今や憤懣のうちに在つて、フリーデマンと話をすると幾分の氣晴しを見出した。彼はフリーデマンを批判し、その卑俗な嘲弄の精神を、いつも長く喜ぶことは出来なかつた。絶えざる嘲笑と否定との調子は、やがては人を苛ら立たせるものとなり、無力を表白するものであつた。然しそれはまた、凡俗な輩の自ら足れりとする愚昧さを以て、心を和らげてくれるものでもあつた。クリストフは、心の底ではこの友を輕蔑しながら、もはや彼なしてすますることが出来なかつた。フリーデマンの仲間で彼より更に下らない曖昧な落伍者共と一緒に、二人がいつも相並んで食卓についてるのが見られた。連中は賭博をし、駄辯を弄し、幾晩もぶつ通しに酒を飲んでゐた。クリストフは、豚料理と煙草とのむか／＼する匂ひの中で、突然我に返ることがあつた。昏迷した眼であたりの人々を見廻した。もはや彼等に

も見覚えがなかつた。彼は心を痛めながら考へた。

「俺が今居るのは何處なのか？ この連中は何者なのか？ 俺は此奴等と何の用があるのか？」

彼等の話や笑ひ聲をきくと、彼は胸糞が悪くなつた。然し彼はその連中と別れるだけの力がなかつた。家に歸つて、自分の魂や慾望や悔恨と、一人きりで向ひ合ふのが、恐れられた。彼は我を取失ひつゝあつた。我を取失ひつゝあることを自ら知らなかつた。彼は探し求めた——彼は見た、残忍な明瞭さを以てフリーデマンのうちに、墮落しきつた將來の自分の面影を。そして、その脅威から覺醒させられる所ではなく、却つてうち倒されてしまつたほど、彼はひどい失望落膽の過程を辿つてゐた。

彼はもし破滅し得たら、破滅したであらう。然し幸にも、他の同種類の人々と同じく、一の反撥力を、破滅に對して他人の持たない一の避難所を、彼は持つてゐた。第一には力があつた。自分の知力よりも更に明敏な、自分の意志よりも更に強い、死ぬことを肯んじない、生きんする本能があつた。また次には、藝術家の不思議な好奇心を、眞に創造力を具へた者が皆有してゐる熱烈な客觀性を、彼は自ら識らずして持つてゐた。如何に愛し、苦しめ、己の情熱に全然身を投げ出して、なほ彼はそれらをちつと見てゐた。それらは彼のうちに

在つたが、彼自身ではなかつた。無数の小さな魂が、彼のうちでは暗々裡に、不可知な而も確かな定まつた一點の方へ、引き寄せられてゐた。空間中で一の神祕の淵から吸ひ寄せられてゐる、星辰の世界にも似てゐた。さういふ無意識的な二重の不斷の状態は、日常生活が眠りに入つて、スフィンクスの眼が、「存在」の多様形の顔が、睡眠の深淵から浮び上つてくる眩迷の瞬間に、特によく現はれてきた。クリストフは最近一年ばかりの間、殊にひどく幻夢につき纏はれた。その中で彼は、自分が同時に、異つた數多の存在で、往々幾世界と幾世紀とで距てられた遠い數多の存在であることを、如何とも出来ない幻によつて、一瞬間のうちにはつきり感ずるのであつた。覺醒の状態になつても彼は、その不安な幻惑に浸されて、而もその原因が何であつたかを覺えてはゐなかつた。それは宛も、一の固定觀念の疲れの如きものであつて、觀念が消え失せてもその痕跡は残つて居り、而もそれが何であつたか了解し得ないのと同じだつた。然るに、彼の魂が日々の網の目の中で苦しげに跳いてる一方には、注意深い晴朗な一つの魂が彼のうちで、それらの絶望的な努力を傍觀してゐた。彼の眼にはそれが見えなかつた。然しその魂は彼の上に、己の隠れた光りの反照を投げかけてゐた。その魂は貪慾であつて、喜んで凡てを感じ、凡てを苦しみ、これらの男、これらの女、この大地、これらの慾望、これらの熱情、これらの思想、而も苦しい凡庸な卑賤なものまで

も、觀察し理解してゐた。——それだけのことで、これらのものにその光明を多少傳ふるに足り、クリストフを眞無から救ひ出すに足りた。その魂は彼に、自分は全くの孤獨ではない——理由は分らなかつたが——といふことを感じさせた。そして、この凡てであることを好み凡てを識ることを好むの念が、この第二の魂が、あらゆる破壊的な情熱に對して城壁を築いてくれた。

この魂は、水の上に彼の頭を維持させるには足りたが、獨力で水から脱することを彼に得さしはしなかつた。彼はまだ、自分の内部を明かに見、自分にうち勝ち、専心することは、中々出来なかつた。如何なる仕事も出来なかつた。生涯中の最も多産的な精神發作の時期を、彼は通つてゐた。——未來の全生涯は既に其處に芽んでゐた。——然しその内心の豐富さは、當座の間、狂妄な行ひとなつてしか現はれなかつた。そして斯かる過剰な充實の直接の結果は、最も貧弱な空粗のそれと異らなかつた。クリストフは自分の生活力に溺らされてゐた。彼のあらゆる力は、恐るべき壓力を受けて、餘りに急激に、全部同時に、一舉に、擴大されてゐた。たゞ意志だけが、それほど急激には擴大されてゐなかつた。意志はそれら一群の怪物に脅かされてゐた。性格はあらゆる方面で龜裂してゐた。他人の眼には、その地震は、その内部の大漲溢は、少しも見えなかつた。クリストフ自身にも、意欲し創造し存在す

るの力がないことだけしか、見えなかつた。慾念、本能的衝動、思想などが、宛も火山の裂目から火煙の立ち昇るやうに、相次いで飛び出して来た。そして彼はいつも自ら尋ねた。「此度は何が出てくるだらう？ 俺はどうなるだらう？ いつも斯うだらうか、或はすつかりおしまひになるだらうか？ 俺は取るに足らない者だらうか、いつまでたつても？」
そして茲に、遺傳的な本能が、以前の人々の悪徳が、現はれ出て来た。——彼は飲酒に耽つた。

*

*

*

*

彼はいつも、酒の匂ひをさせ、笑ひ興じ、ぐつたりして、家に戻つて来た。
憐れなルイザは、彼の様子を眺め、溜息をつき、何とも云はず、そして祈りをした。

所が或る晩、彼は酒場から出て、町外れの街道で、數歩前の所に、例の柵を背負つてゐるゴットフリート叔父の、をかした影を見つけた。數ヶ月來この矮人は、土地へ歸つて来たことがなかつた。いつもその不在が次第に長くなつてゐた。でクリストフは大變喜んで、彼を呼びかけた。重荷の下に前屈みになつてゐるゴットフリートは、ふり返つた。彼は、大袈裟な

身振りをやつてゐるクリストフの姿を見、或る標石の上に坐つて、待ち受けた。クリストフは元氣な顔付をし、やたらに飛び跳ねながら、近寄つていつた。そして途方もないなつかしい様子を示して、叔父の手をうち振つた。ゴットフリートは、長い間彼を見つめて、それから云つた。

「今晚は、メルキオルさん。」

クリストフは叔父が間違へたのだと思つた。そして笑ひだした。

「可哀さうに筆碌したんだな、」と彼は考へた、「記憶おぼえがないんだな。」

ゴットフリートは實際、老いぼれ萎び縮みいぢけた様子をしてゐた。漸く短い小さな息をしてゐた。クリストフはやたらに饒舌り續けた。ゴットフリートは柵をまた肩にかつき、黙つて歩きだした。身振りをし大聲に饒舌り立てゝるクリストフと、咳をしたが黙つてゐるゴットフリートとは、相並んで歸りかけた。そしてクリストフが呼びかけると、ゴットフリートは彼をやはりメルキオルと呼んだ。こんどはクリストフは尋ねてみた。

「あゝ、どうして僕をメルキオルと呼ぶんです？ 僕はクリストフといふんですよ。よく知つてゐるぢやないですか。僕の名を忘れたんですか？」

ゴットフリートは、立ち止りもせず、彼の方に眼を擧げ、彼を見つめ、頭を振り、そして

冷かに云つた。

六五四

「いやメルキオルさんだ。よく見覚えがある。」

クリストフは駭然として立ち止つた。ゴットフリートはとぼくと歩き続けてゐた。クリストフは返辭もせず、その後についていつた。彼は酔もさめてしまつた。或る寄席珈琲店の戸の側を通りかゝると、入口の瓦斯燈と寂しい鋪石との映つてゐる、その曇つた板硝子の所へやつて行つた。彼はメルキオルの面影を認めた。彼は心顛倒して家に歸つた。

彼は、自ら尋ね、自ら魂を探りながら、その夜を——苦悶の一夜を——明した。彼は今や了解した。さうだ、彼は自分のうちに芽を出してしまつてる本能や悪徳を認めた。彼はそれが恐ろしかつた。メルキオルの死體の傍で通夜をしたこと、種々誓ひを立てたこと、それを彼は考へた。そして、其後の自分の生活を調べてみた。悉く誓ひに背いてゐた。一年この方、何をしてきたのであつたか？ 自分の神のために、自分の藝術のために、自分の魂のために、何をしてきたのであつたか？ 自分の永遠のために、何をしてきたのであつたか？ 失はれた努力もなかつた。互に破壊し合ふ慾念の混亂。風、埃、虛無……。望んでも何の甲斐があつたらう？ 望んだことは何一つ爲してゐなかつた。望んだことの反對をばかり爲してゐ

た。ならうと望まないものになつてしまつた、といふのが彼の生活の總勘定であつた。

彼は少しも寝なかつた。朝の六時頃(まだ暗かつた)、ゴットフリートが出發の仕度をする音が聞えた。——ゴットフリートはそれ以上足を留めようと思つてゐなかつた。町を通るついでに、いつもの通り、妹と甥とを抱擁しにやつて來たのであつた。でも翌朝はまた出かけると、前以て云つて置いた。

クリストフは下りて行つた。苦悶の一夜のために蒼ざめて落ち凹んだ彼の顔を、ゴットフリートは見た。彼はクリストフにやさしく微笑んでやり、一寸一緒に來ないかと尋ねた。未明に二人は一緒に出かけた。何も語る必要はなかつた。互に了解してゐた。墓地の側を通ると、ゴットフリートは云つた。

「はひらうよ、ね。」

彼はこの地へ來ると必ず、ジャン・ミシエルとメルキオルとを訪れてゐた。クリストフはもう一年も墓參をしたことがなかつた。ゴットフリートはメルキオルの墓の前に跪いた、そして云つた。

「このお二人がよく眠られるやうに、そして私達に苦しみをかけられないやうに、お祈りをお願いします。」

彼の考へはいつも、不思議な迷信と明るい善識とが交り合つてゐた。クリストフは時としてそれに驚かされることがあつた。然し此度は、その考へをよく了解した。二人はもうそれ以上何にも云はずに、墓地を出てしまつた。

軋る音を立てる鐵門をまた閉めてから、二人は壁に沿つて、雪の滴りが落ちてゐる墓地の糸杉の下の小路を辿り、眼覺めかけてゐる寒さうな畑中を歩いて行つた。クリストフは泣きだした。

「あゝ、叔父さん、」と彼は云つた。「僕は苦しい！」

彼は戀の経験については、ゴットフリートを困らすか不快がらせるだらうといふ妙な懸念から、敢て語り得なかつた。そして、自分の恥しいこと、凡庸なこと、卑劣なこと、誓ひを破つたこと、などを話した。

「叔父さん、どうしたらいいでせう？　僕は望んだ、闘つた。そして一年たつても、やはり前と同じ所に居る。いや同じ所にも居ない！　退歩してしまつたんです、僕は何の役にも立たない、何の役にも立たないんです。生活を駄目にしてしまつたんです、誓ひに背いたんです！……」

二人は町を見晴す丘に上りかけてゐた。ゴットフリートはやさしげに云つた。

「そんなことは今度きりぢやないよ。人は望む通りのことをするものではない。望む、また生きる、それは別々だ。自分で慰めなけりやいけない。肝腎なことは、ねえ、望んだり生きたりするのに倦まないことだ。その他のことは私達の知つたことぢやない。」

クリストフは絶望の様子でくり返した。

「僕は誓ひに背いたんです！」

「聞えるかい？……」とゴットフリートは云つた。（田舎で鶏が鳴いてゐた。）

「あの鶏も皆、誓ひに背いた誰か他の人のためにも歌つてるんだ。私達の各人のために、毎朝歌つてくれる。」

「もう僕のために、」とクリストフは切なげに云つた、「鶏が歌つてくれない日も來るでせう……明日のない日も。そして僕は生活をどうしといたらいいんでせう？」

「いつだつて明日はあるよ。」とゴットフリートは云つた。

「でも望んだつて何の役にも立たないんなら、どうしたらいいでせう？」

「用心をするがいゝ、そして祈るがいゝ。」

「僕はもう信じてゐないんです。」

ゴットフリートは微笑んだ。

「信じてゐないとしたら、生きてゐられない筈だ。誰でも信じてるものだ。祈るがいよよ。」
 「何を祈るんです？」

ゴットフリートは、眞赤な冷たい地平線に出かゝつてゐた太陽を、彼にさし示した。

「日の出に對して、信心深くなければいけない。一年後のことを、十年後のことを、考へてはいけない。今日の^{こんじち}ことを考へるんだよ。理窟を捨てしまふがいよ。理窟はみんな、いよかね、たとひ道德の理窟でも、よくないものだ、馬鹿げたものだ、害になるものだ。生活に無理をしてはいけない。今日に^{こんじち}生きるのだ。その日その日に對して信心深くしてるのだ。一日を愛し、尊敬し、殊にそれを凋ませず、花の咲くのを妨げないことだ。今日の^{ひふ}やうにどんよりして陰氣でも、一日を愛するのだ。氣を疎んではいけない。御覽よ。今は冬だ。凡て眠つてゐる。がよい土地は、また眼を醒すだらう。よい土地でありさへすればいよ、よい土地のやうに辛抱強くありさへすればいよ。信心深くしてるんだよ。待つんだよ。お前が善良なら、萬事がうまくいくだらう。もしお前が善良でないなら、弱いなら、成功してゐないなら、それでも、やはりそのまゝで満足してゐなければいけない。勿論それ以上出来ないからだ。それに、なぜそれ以上を望むんだい？ なぜ出来もしないことを離礙するんだい？ 出来ることをしなければいけない……我が爲し得る程度を。」

「それぢや餘りつまらない。」とクリストフは顔を擧めながら云つた。

ゴットフリートは親しげに笑つた。

「それでも誰よりも以上のことを爲すわけだ。お前は傲慢だ。英雄になりたがつてる。それだから馬鹿なまねしかやれないんだ……英雄！……私はそれがどんなものだからよく知らない。然しだね、私が想像すると、英雄といふのは、自分に出来ることをする人だ。所が他の者はさういふ風にはやらない。」

「あゝ」とクリストフは溜息をついた、「そんなら生きてゝも何になるでせう？ 生きてても無駄です。『欲するは能ふことなり！』と云つてる人達もあります……。」

ゴットフリートはまた靜に笑つた。

「さうかい？……だがそれは大きな嘘つきだよ。でなけりや、大した望みを持つてない人達だ……。」

二人は丘の頂に着いてゐた。二人はやさしく抱擁し合つた。小さな行商人は、疲れた足取りで去つていつた。クリストフは、その遠さかつてゆく姿を眺めながら、ちつと考へに沈んだ。彼は叔父の言葉を自らくり返した。
 「我が爲し得る程度を。」

そして彼は微笑みながら考へた。

「さうだ……それでもやはり……十分だ。」

彼は町の方へ歸りかけた。堅くなつた雪が、靴の下で音を立てた。冬の鋭い朔風が、丘の上に、かぢけた樹木の裸枝を震はしてゐた。その風は、彼の頬を赤くなし、彼の皮膚を刺し、彼の血を鞭うつた。下の方には人家の赤い屋根が、眩しい寒い日の光りに笑つてゐた。空気が強く酷しかった。凍つた土地は、辛辣な歡喜を感じてゐるがやうだつた。クリストフの心も土地と同じだつた。彼は考へてゐた。

「俺も眼を醒さう。」

彼の眼にはまだ涙があつた。彼は手の甲でそれを拭つた。そして、霧の帷の中にはひつてゆく太陽を、微笑みながら眺めた。雪を含んだ重い雲が、強風に吹き立てられて、町の上を通つてゐた。彼はその雲に向つて輕侮の身振をした。氷のやうな風が吹いてゐた……。

「吹け、吹け！……俺をどうにでもしろ！ 俺を吹き送れ！……俺は行く先をよく知つてゐるのだ。」

第四卷 反抗

序

六六二

ジャン・クリストフの多少激越なる批評的性格は、相次いで各派の讀者に、屢々その氣色を害せしむるの恐れあることと思ふから、予はその物語の新たなる一部に入るに當つて、予が諸友及びジャン・クリストフの諸友に願ふに、吾人の批判を決定的のものと思惟せざらんことを以てしたい。吾人の思想の各は、吾人の生涯の一瞬間に過ぎない。もし生きるといふことが、己の誤謬を正し、己の偏見を征服し、己の思想と心とを、日々に擴大するためのものではないならば、それは吾人に何の役に立たう？待たれよ！たとひ吾人に謬見あらうとも、許されよ。吾人は自ら謬見あるべきを知つてゐる。そして己の誤謬を認むる時には、諸君よりも更に苛酷にそれを咎むるであらう。日々に吾人は、多少なりと更に眞理に近づかんと努めてゐる。吾人が終末に達する時、諸君は吾人の努力の價値を判断せらるゝであらう。古き諺の云ふ通り、「死は一生を讃め、夕は一日を讃む。」

千九百〇六年

ロマン・ローラン

一流 沙

自由！ 彼は自由の身たることを感じてゐた……他人及び自分自身から自由であるとして！ 一年この方絡まれてゐた情熱の網が、俄に解け去つたのであつた。如何にしてか？ それは彼に少しも分らなかつた。網の目は彼の生命の壓力を支へることが出来なかつた。それは、強健なる性格が、前年の枯死した包皮を、呼吸を妨ぐる古い魂を、荒々しく裂き捨てる、生長の發作の一であつた。

クリストフは何が起つたのかよく分らずに、たゞ胸一杯に呼吸してゐた。ゴットフリートに別れて戻つて來ると、氷のやうな朔風が、町の大門に吹き込んで渦巻いてゐた。人は皆その強風に向つて頭を下げた。出勤の途に在る工女等は、裳衣に吹き込む風と腹立たしげに争つてゐた。鼻と頬とを眞赤にし、憤怒の様子で、一寸立ち止つては息をついてゐた。今にも泣き出しさうにしてゐた。クリストフは喜んで笑つてゐた。彼は嵐のことを考へてはゐなかつた。他の嵐のことを、今脱れて來たばかりの嵐のことを、考へてゐた。彼は冬の空を、雲に覆はれた町を、苦闘しつゝ通つてゆく人々を、眺め廻した。自分のまはりを、自分のうちを見廻した。もはや何かに彼を繋いでゐるものは何物もなかつた。彼はたゞ一人であつた。

た……たゞ一人！ たゞ一人であることは、自分が自分のものであることは、如何に喜ばしいことであらう。繋がれてゐた鎖を、思ひ出の苦悶を、愛する面影や嫌惡すべき面影の幻を、遁れてしまつたことは、如何に喜ばしいことであらう。遂に生き、生の餌食とならず、生の主人となることは、如何に喜ばしいことであらう！

彼は雪で眞白くなつて家に歸つた。犬のやうに愉快げに身を揺つた。廊下を掃いてゐた母の側を通りかゝると、宛も子供にでも云ふやうに、愛情の籠つた舌つたるい聲を出しながら、彼女を上を抱き上げた。年老いたルイザは、雪が融けて濕つてる息子の腕の中で、身を跳いた。そして子供のやうな仇氣ない笑ひをしながら、「大馬鹿さん！」と彼を呼んだ。

彼は自分の居室へ、大膽に上つていつた。小さな鏡に顔を映しても、よく見えなかつた。それほど薄暗かつた。然し彼の心は喜び勇んでゐた。碌に動き廻ることも出来ないほどの狭い低い室も、彼には一王國のやうに思はれた。彼は扉を鍵で閉め切り、そして絶えず笑つた。遂に自分自身をまた見出しかけてゐたのだ！ 如何に久しい前から自分を取失つてゐたことだらう！ 彼は急いで、自分の考への中に沈潜していつた。その思想は、遠く金色の靄の中に融け込んでゆく大きな湖水のやうに、彼には思はれた。苦熱と酷暑との一夜を明した後、足を清冽な水に洗はれ、身體を夏の朝の微風に撫でられながら、その湖水のほとりに立つて

わたのだ。彼は飛び込んで泳ぎ出した。何處へ行くのか分らなかつた。而もそれは殆んどどうでもいゝことだつた。たゞ當もなく泳ぎ廻るのが愉快だつた。彼は笑ひながら、自分の魂無数の音に耳傾けながら、黙つてゐた。魂には無数の生物が蠢いてゐた。何にも見分けられなかつた。頭がくらくくした。たゞ眩いほどの幸福ばかりを覺えた。自分のうちにそれらの見知らぬ力を感じて嬉しかつた。そして自分の能力を試すことは不精げに後廻しとして、先づ内心に咲き亂れてる花に矜らかに酔つて、陶然としてしまつた。數ヶ月來押へつけられてゐたのが、俄に春が來たやうに、一時に咲き揃つた花であつた。

母は彼を朝の食事に呼んでゐた。彼は下りていつた。一日戸外で暮した後のやうに、頭が茫然としてゐた。然し彼のうちには深い喜悅の色が輝いてゐた。ルイザは彼にどうしたのかと尋ねた。彼は答へなかつた。母の胴體を捉へて、スープ鍋からは湯氣が立つてる食卓のまはり、無理に一廻り踊らした。ルイザは息を切らして、彼を狂人だと呼び立てた。それから彼女は手を打つた。

「まあ！」と彼女は心配さうに云つた、「また戀したのに違ひない！」

クリストフは笑ひだした。彼は胸布を宙に投げ上げた。

「戀だつて！……」と彼は叫んだ、「おやく……嘘です、嘘です、もう澤山だ。安心して

よござんすよ。もうするもんですか、一生涯しません！……あゝあゝ！」

彼は水をなみくぐと一杯飲み干した。

ルイザは安心して彼を眺め、首肯き、微笑んでゐた。

「當にはならない酔つ拂ひの約束だね、」と彼女は云つた、「まあ晩までのことでせうよ。」

「それでも一日は守るわけですよ。」と彼は上機嫌に答へた。

「なるほどね。」と彼女は云つた。「だが一體、どうしてお前さんはさう嬉しがつてるのですか？」

「僕は嬉しいんです。それつきりですよ！」

食卓に兩肘をつき、彼女と向ひ合ひに坐つて、今後どんなことをするか、それを彼女に話してやつた。彼女はやさしい疑念の様子でそれを聞き、スープが冷めてしまふと靜に注意した。彼は自分の云ふことが彼女には分つてゐないと知つてゐた。然しそれを氣に止めなかつた。彼は自分自身に對して語つてゐるのであつた。

二人は微笑みながら顔を見合つてゐた、彼は語り、彼女はよく耳も傾けずに。彼女は息子を自慢にしてゐたが、その藝術上の計畫には大して重きを置いてゐなかつた。彼女は考へてゐた、「この人は幸福なのだ。それが一番肝腎なことだ。」——彼は自分の話に自ら酔ひなが

ら、母のなつかしい顔を、頸には黒い襟巻をよくまとひ、白い髪をし、愛情の籠つた眼で自分を見守り、如何にも寛大な晴々とした落着の様子をしてる、母の顔を眺めてゐた。彼女の心のうちの考へがすつかり読み取られた。彼は冗談に云つてみた。

「お母さんにとつてはどうでもいゝことなんでせうね、僕の話してることなんかは。」

「いゝえ、いゝえ！」

彼は彼女を抱擁した。

「なにさうですよ、さうですよ！ まあ云ひ譯なんかしなくてもいゝんですよ。お母さんの方が尤もです。たゞ、僕を愛して下さい。僕は人に理解して貰はなくてもいゝんです——あなたにも、誰にも。もう今ぢや、誰もいません、何もいません。自分のうちに何もかも持つてるんです……。」

「そうら、」と彼女は云つた、「此度はまた別な狂氣沙汰になつてきた！……だがさうならなければならぬなら、まだ今度のゝ方がましだ。」

*

*

*

*

自分の思想の湖上を漂ふ心楽しい幸福！……舟底に横はり、身體は日の光りに浴し顔は水の面を走る爽かな微風になぶられて、彼は宙に浮びながらとくとしてゐる。寝そべつた彼の身體の下には、揺らめく小舟の下には、深い水が感ぜられる。手はひとりでに水に浸される。彼は起き上る。子供の折のやうに、舟縁に願をもたして、過ぎてゆく水を眺める。稲妻のやうに飛び去つてゆく、不思議な生物の輝きが見える……また他のが、次にまた他のが……いつもそれと異つた生物である。彼は自分のうちに展開してゆく奇怪な光景に、笑つてゐる。自分の思想に笑つてゐる。思想を何處にも固定させる必要はない。選ぶこと、それら數限りない夢想のうちに何で選擇の要があらう？ まだ時間は十分ある……後のことだ！……好きな時に網を投じさへすれば、水中に光つてるのが見える怪物を、いつでも引上げられるだらう。今はそれをたゞ通らして置く……後のことだ！……

暖い風と分らない位のかすかな流れとのまゝに、舟は漂つてゐる。穩かで、日が輝り渡り、寂然としてゐる。

*

*

*

*

遂に彼は懶げに網を投ずる。水沫しみずの立つ水の上に身を屈めて、見えなくなるまで網を見送る。暫くぼんやりした後、ゆる／＼と網を引く。引くに從つて網は益々重くなる。水から引上げようとする間に、一寸手を休めて息をつく。獲物を手に入れてゐることは分るが、どんな獲物だかは分らない。彼は期待の楽しみをゆる／＼と味ふ。

彼は遂に意を決する。燦然たる甲鱗の魚類が、水から現はれてくる。巢の中の無数の蛇のやうに、身を振つてゐる。彼はそれらを珍らしげに眺め、指で動かす、最も美しい奴等を一寸手に取りたくなる。然し水から出すとすぐに、その光澤は褪せてきて、その姿が指の間に融け込む。彼はそれらを水に投げ込み、また他のを漁り初める。自分のうちに動いてる幻想を、どれか一つ選び取るよりも、寧ろそれらを皆代る交る眺めてみたくなる。透明な湖水の中に自由に泳いでゐる時の方が、ずっと美しいものに思はれる……。

彼はそのあらゆる種類のものを漁りだした。何れも皆奇怪なものばかりであつた。數ヶ月來彼のうちにはあらゆる觀念が積つてゐて、而も彼はそれを利用して費消することがなかつたので、今やその豊富さになやんでゐた。然し凡て、雜然と交り合つてゐた。彼の思想は物置場であり、ユダヤ人の古物店であつて、珍稀な器物、高價な布、鐵屑、襤褸などが、同じ室の中に堆く積まれてゐた。どれが最も價值ある物であるかを、彼は見分けることが出来なかつた。

つた。何れにも同じく興味があつた。諧音のそよぎ、鐘のやうに鳴り響く色調、蜜蜂の羽音に似た和聲ハモニー、戀せる唇のやうに微笑む旋律メロデー。また、風景の幻影、人の面影、熱情、靈魂、性格、文學的觀念、形而上學的觀念。また、雄大不可能な大計畫、あらゆるものを音樂にて描出し種々の世界を包括せんと欲する、四部曲テトロジーや十部曲デカロジー。また多くは、一つの聲音、街路を通る一人の男、雨の音、内心の節奏リズム、など些細なものから俄に呼び起される、仄かな明滅する感覺。——それらの計畫の多數は、たゞ題名だけでしか存在してゐなかつた。一つもしくは二つ限りの曲想にまとめられるものであつたが、それで十分だつた。極めて年若い人々と同じく彼も亦、創造しようとして夢想してゐたものを創造したのだと信じてゐた。

*

*

*

*

然し彼は、斯かる煙の如きものに長く満足するには、餘りに多く生活力を具へてゐた。彼は空想的な所有に倦きて、己の幻想を實際に掴み取らうと欲した。——先づ何れより初むべきか？ 何れの幻想も皆等しく重要なものに思はれた。彼はそれらをくり返しまたくり返して調べた。投げ捨てゝはまた取り上げた。……否、もはや元のを取り上げるのではなかつた。

もはや同じものではなかつた。二度と捉へることは出来なかつた。絶えず幻想は變化しつゝあつた。眺めてるうちにも、手の上で眼の前で、變化した。急がなければならなかつた。而も彼は急いでやる事が出来なかつた。自分の仕事の緩漫さに困りぬいた。全部を二日に仕上げたいほどであるのに、僅かな仕事を仕出來かすのにも非常な困難を感じた。最もいけないことには、着手したばかりでもう厭になつた。幻想は通り過ぎてゆき、彼自身も通り過ぎていつた。一つのことをやつてると、他のことをやれないのが残念だつた。立派な主題を一つ選び取つただけで、もうその主題に興味がなくなるやうに思はれた。斯くてそのあらゆる財寶も、彼には更に役立たなかつた。彼の思想は皆、彼が手を觸れさへしなければ生々としてゐた。首尾よく手で捉へると、もう既に死んでゐた。それはタンタルスの苦痛に似てゐた。届く所に果實がなつてゐるけれど、それを手に取ると石となつた。唇の近くに清水があるけれど、身を屈めると遠のいてしまつた。

彼は渴を癒さんために、既に手に入れた泉で、自分の舊作で、喉を沾さうとした。……厭な飲料！ 彼はそれを一口含むや、罵りながらすぐに吐き出した。何事ぞ、この生温い水が、この空粗な音楽が、自分の音楽であつたのか？——彼は自分の作曲を一頁り讀み返してみた。そして駭然とした。もう何にも分らなかつた。どうしてそんなものを書く氣になつた

のか分らなかつた。彼は顔を赤らめた。或る時などは、最も幼稚な頁を一つ讀んだ後で、室に誰も居ないかふり返り見て、それから恥しがつてる子供のやうに、寢臺の所へ行つて、枕に顔を隠したこともあつた。また或る時は、自分の笑ふべき作品が如何にも滑稽に思へて、我ながら自分の作であることを忘れた……。

「あゝ馬鹿だなあ！」と彼は腹を抱へて笑ひながら叫んだ。

然し最も厭味なのは、戀愛の苦しみや喜びなど、熱烈な感情を表現したつもりである曲譜だつた。さういふものを讀むと彼は、蚊にでもさされたかのやうに、椅子の上に飛び上つた。卓子を拳でうち叩き、憤怒の喚き聲を發しながら、自ら頭を叩いた。荒々しく自ら罵り、豚だの恥知らずだの大馬鹿者だの道化者だのと自分を呼んで、暫くはある限りの悪口を自分に浴せた。しまひには怒鳴り散らしたために眞赤になつて、鏡の前につゝ立つた。そして顔を掴みながら云つた。

「見ろ、見ろ、間拔め、何といふ馬鹿な顔をしてるんだ！ 嘘もいゝ加減にしろ、無頼漢めが！ 水だ、水だ！」

彼は顔を盥につき込んで、息がつかまるまで水につけておいた。そして顔を充血さし、眼をむき出し、海豹のやうに息を吐きながら、水から顔を出すと、身體に滴る水を拭ひもやら

六七四
す、急いで卓子の所に行き、呪はれたる曲譜を引摺み、それを猛然として引裂きながら、呟いた。

「こら、やくざ者め！……こら、こら！……」
そして漸く胸をなで下した。

それらの作品が殊に彼を激昂させた所以は、その虚偽なることであつた。本當に感じたものは何もなかつた。暗誦した句法、小學生徒の修辭法、のみであつた。盲人が色彩のことを語るやうな調子で、彼は戀愛のことを語つてゐた。流行の幼稚な説をくり返しながら、聞きかぢりで語つてゐた。そしてたゞに戀愛ばかりではなく、またあらゆる熱情が、放言の題目に使はれてゐた。——それでも彼は常に眞實たらんと努めたのであつた。——然し眞實たらんと欲するだけでは足りない。眞實であり得なければいけない。そして、まだ少しも人生を知らないうちに、いかで眞實たることを得やう？ それらの作品の虚構を彼に開き示してくれたものは、彼と彼の過去との間に俄に溝渠を穿つたものは、最近半年間の經驗であつた。彼は幻影から脱出しつゝゐた。今や彼のうちには、己のあらゆる思想の眞偽の度を判斷するためにあてがひ得る、現實の尺度が存在してゐた。

彼は熱情なしに作られた昔の曲譜に嫌惡の情を覺えたので、その結果例の誇張辭から、熱

烈な要求に迫られて書かせられるものゝ外は、もう一切書くまいと決心した。そして觀念の探求を其處に中止して、もし創作熱が雷電のやうに落ちかゝつて來るのでなければ、永久に音楽を捨てようと思つた。

* * * * *

彼が斯く自ら誓つたのは、雷鳴が到來しつゝあることをよく知つてゐたからである。

雷は、自ら欲する處にまた欲する時に、落ちる。然し雷を引きよせる高峰がある。或る場所——或る魂——は、雷鳴の巢である。それらは雷鳴を創り出し、或は地平の四方から雷鳴を呼ぶ。そして、一年の或る月と同じく、生涯の或る年齢は、極めて多くの電氣を飽和してゐるので、落雷が其處に生じてくる——隨意にはなくとも——少くとも期待する時に。

全身心が緊張する。屢々、幾日も幾日もの間、雷鳴が準備される。燃え立つた入道雲が、白けた空に懸つてゐる。一陣の風もない。澱んだ空氣が、醗酵して居り、沸き立つてるやうに見える。大地は茫然として、沈黙してゐる。頭腦は、熱に轟いてゐる。全自然は、蓄積された力の爆發を、重々しく振り上げられ、黒雲の鐵砵かたしよの上に一舉に打ち下されんとする、鐵

槌の打撃を、待つてゐる。陰惨な熱い大きな影が、通り過ぎる。熱火の風が、吹き起る。全身の神経は、木の葉のやうにうち震へる。——それから、また沈黙が落ちてくる。空はなほ雷電を醸し続ける。

斯かる期待のうちには、一の歡ばしい苦悶がある。不安に押へつけられながらも、人は己の血脈中に、宇宙を焼きつくす火が流れるのを感じる。醸造樽中の葡萄の實のやうに、飽滿せる魂は坩堝の中で沸き立つ。生と死との無数の萌芽が、魂を悩ます。何が生じて來るであらうか？ それを魂は知らない、魂は妊婦のやうに、自分のうちに眼を向けて口を嚙み、胎内の戦きに氣遣はしげに耳傾ける。そして考へる、「私から何が生れるであらうか？」

時には、期待が徒となることもある。雷鳴は起らずに消えてしまふ。人は頭が重く、張合がぬけ、氣力疲れ、厭氣を催して、我に返る。然しそれは時期が延びたばかりである。雷鳴は常にまた起つてくる。今日でなければ明日であらう。延びれば延びるほど、益々激しくなるであらう……。

それが今起つた！……雲は心身のあらゆる深みより湧き出した。青黒色の濃密な集團となつた雲は、狂はんばかりに打ちたたきつたためく電光に劈かれて、魂の地平を取囲みながら、息をつめてる空を雙の翼で荒々しく打ちながら、日の光りを消しながら、眩暈せしむるばかりに重

重しく翔つてゆく。狂暴の時間！……猛り立つた自然要素は、精神の平衡と事物の存在とを確保する法則から閉ぢ込められてゐた、その籠を今や脱して、巨大雑多な形を取り、意識界の闇夜を支配する。人は苦悶の心地を感じる。もはや生きようとは望まない。たゞ望まれるものは、終末のみである、解放の死のみである……。

そして俄に、電光が閃く！

クリストフは喜びの喚きを發してゐた。

*

*

*

*

喜び、喜びの激越、存在し存在するであらう凡てのものを照らす太陽、創造の崇高なる喜び！ 創造することより他に喜びはない。創造する人々より他に生きてゐるものはない。他の者は凡て、地上に浮び生命に無關係な影に過ぎない。生のおらゆる喜びは、戀愛、才能、行爲など、皆創造の喜びである——唯一つの火爐から發し力に燃え立つ創造の喜び。その大なる籠のまはりに席を有しない人々も、野心家、利己主義者、空疎な遊蕩兒なども——その色褪せた反映は身を暖めようとしてとめる。

肉體界もしくは精神界に於て、創造することは、身體の牢獄から脱することであり、生命の鷗風中に飛び込むことであり、「存在する者」となることである。創造すること、それは死を殺すことである。

永久に生命の焔が、一も發しないやうな、己の干乾びた身體と己のうちに在る闇夜とを、たが徒らにうち眺めながら、地上に孤獨のまゝ埋もれてゐる無益なる存在者こそ、實にも不幸である。花をつけた春の樹木のやうに、生命と愛との饒多な重みを、少しも感ずることのない魂こそ、實にも不幸である。世間は名譽と幸福とをその上に積み重ねるとも、それは死骸に冠するものである。

* * *

クリストフが一閃の光りに打たれた時、一の放電が彼の全身に傳はつた。彼は駭然として打ち震へた。それは宛も、海洋の中に在つて、闇夜の中に在つて、突然に陸地を見出したやうなものであつた。或はまた宛も、群集の中を通りながら、二つの深い眼にぶつかつたやうなものであつた。さういふ現象は屢々、彼の精神が空虚のうちに絶望の身悶えをする、悄沈

の時間の後に起つた。然しまた、母と話をし或は街路を歩きながら、他のことを考へてゐる瞬間に、なほ屢々起つた。街路に在る時には、世間への氣兼に妨げられて、その喜びを餘りに激しく現はすことが出来なかつた。然し家に居る時には、もう何の拘束もなかつた。彼は足を踏み鳴した。勝鬨の喇叭を奏した。母はそれに馴れてきて、遂にはその意味を知るやうになつた。卵を産みためたの牝鶏のやうだと、彼女はよくクリストフに云つた。

彼は音樂的觀念に隅々まで浸透されてゐた。その觀念は、獨立して完全な樂句の形をなし、てゐることもあつたが、多くは、一の作品全部を包み込む大なる星雲の形をなしてゐた。その樂曲の結構は、主要の筋途は、彫刻的の明確さを以て影から浮出してゐる眩いばかりの樂句を、處々に鏤めた覆ひを通して、おのづから見えてゐた。然しそれは一の閃光に過ぎなかつた。また時とすると、相次いで多くの閃光が起ることもあつた。各閃光は闇夜の各隅々を照らした。然し普通は、その氣まぐれな力は、一旦不意に現はれた後に、輝いた尾を後に残しながら、己の神秘的な隠れ家の中に消え失せて、數日姿を現はさなかつた。

さういふ靈感の悦びは、クリストフに他の凡てを嫌はしたほど熾烈なものであつた。經驗に富んだ藝術家は、靈感は稀なものであることを知つて居り、直覺の作品を完成するには、理知に俟つべきものであることを、よく知つてゐる。彼は己の觀念を榨木にかけ、それに含

んでゐる醇良な汁を、最後の一滴までも滴らせる——(時によつては、觀念に白水を割ることさへも辭さない)。——然しクリストフは、まだ極めて若く極めて自信に富んでゐたから、さういふ惨めな方法を輕蔑してゐた。全く自發的なものでなければ何も作らないといふ、不可能な夢想を懐いてゐた。もし彼が眼を閉ぢて自ら快しとしてゐなかつたなら、己の企圖の馬鹿々々しさを容易く認めただであらう。勿論彼は當時、内部充實の時期に在つて、虚無の潜入し得るやうな間隙を、空虚を、少しも持つてはゐなかつた。彼にとつては凡てのものが、眼に見る凡てのもの、耳に聞く凡てのもの、日々の生活に於てぶつかる凡てのもの、悉くこの無盡藏の豊富さを裏書きするものとなつてゐた。一つの眼付も、一つの言葉も、魂のうちに幻想の收穫を齎してゐた。彼の思想の無際限な天には、無数の乳白色な星が、生きたる光りの河が、流れてゐた。——とは云へ、その當時でもやはり、凡てが一舉に消滅する瞬間もあつた。そして、たとひ闇夜は長く續かなかつたにしろ、魂の引續いたる沈黙をまだ苦しむ隙が殆んどなかつたにしろ、その不可知な力に對するひそかな恐れがないでもなかつた。その力は、彼を訪れては立ち去り、また戻つてきては消えていつた……此度はどれ位の間か？ また戻つて來ることがあるだらうか？——彼は傲慢にもさういふ考へを卻け、そして自ら云つた。「この力こそ、俺自身だ。この力がもう無くなる日には、俺ももう存在すまい。俺は自

殺してやらう。」——彼は身體の震へが止まなかつた。然しそれもやはり悦びだつた。

けれども、當分泉の涸れる憂はなかつたにしても、クリストフは既に、その泉が作品全體を養ふには足りないことを知つてゐた。觀念は大抵いつも、生地キチのまゝで現はれてきた。それを母岩から分離させることに骨折らなければならなかつた。また觀念はいつも、斷續して躍り立ちながら、何等の連絡もなく現はれてきた。それを互に連結せしむるためには、慎重なる理知と冷靜なる意志との一要素を加味して、新しい一體に鍛へ上げなければならなかつた。クリストフは極めて藝術的だつたので、それをしないではなかつた。然し彼はさう是認したくはなかつた。彼は内心のモデルをそのまま騰寫してると無理にも思ひ込んでゐた。然し實はそれを讀み易くするために、多少の變更を餘儀なくせしめられてゐた。——否その上に、意味を曲解することさへもあつた。音樂的觀念が如何に猛然と襲ひかゝつてきて、その意味を解き得ないことが屢々あつた。その觀念は、「存在」の底深い所から、識域を超えた遙かの彼方から、俄に迸り出て來るのであつた。そして普通の尺度を越えた全く純粹なるその「力」のうちには、意識と雖も、自分の心を亂す事柄を、自分が定義し分類すべき人間的感情を、少しも認めることが出来なかつた。喜びも悲しみも悉く、たゞ一つの熱情のうちに交つてゐた。而もその熱情は理知を超越したものであつたから、到底理解し難いのであつ

た。それでも、理解するしないに拘らず、理知はその力に一の名前を與へんと要求し、人が己の頭腦の巢の中に營々として築いてゆく論理組織の一つに、それを結びつけんと要求してゐたのである。

それでクリストフは、自分の心を亂すその陰闇な力には一定の意味があり、而もその意味は自分の意志と調和してゐるものと、確信してゐた——確信したがつてゐた。深い無意識界から迸り出て来る自由な本能は、自分と何等關係のない明確な觀念と、理性の輓の下に於て、否應なしに連結せしめられてゐた。それ故に斯かる作品は、クリストフの精神が描き出した大なる主題と、彼自身の知らない全く異つた意味を待つてゐる粗野な力との、一の誤れる並列に過ぎなかつた。

*

*

*

*

彼は、自分のうちで相衝突してゐる矛盾せる力に驅られながら、また、描出することは出来ないが然し矜らかな喜びを以て感じてゐる沸き立つた力強い生命を、支離滅裂な作品中にやたらに投げ込みながら、頭を下げて手探りに進んでいつた。

自分の新しい力を意識した彼は、自分の周圍に存るものを、尊重するやうに云ひ聞かせられてゐるものを、文句なしに尊敬してゐるものを、初めて正視することが出来た。——そして彼は直ちに、傲慢なる自由さを以てそれを批判した。覆面は裂けた。彼はドイツの虚偽を見た。

如何なる民族にも、如何なる藝術にも、皆それ／＼虚構がある。世界は、些少の眞理と多くの虚偽とで身を養つてゐる。人間の精神は虚弱であつて、純粹無垢なる眞理と調和し難い。その宗教、道德、爲政家、詩人、藝術家、などは皆、眞理を虚偽の衣に包んで提出しなければならぬ。それらの虚偽は各民族の精神に調和してゐる。各民族によつて異つてゐる。これがために、各民衆相互の理解が極めて困難になり、相互の輕蔑が極めて容易となる。眞理は各民衆を通じて同一である。然し各民衆は己の虚偽を持つてゐて、それを己の理想と名づけてゐる。その各人が生より死に至るまで、それを呼吸する。それが彼にとつては生活の一條件となる。たゞ數人の天才のみが、己の思想の自由なる天地に於て、男々しい孤立の危機を幾度も経過した後、それから脱出することを得るのである。

つまらないふとした機會が、ドイツ藝術の虚偽をクリストフに開き示した。この虚偽に彼がその時まで氣付かなかつたのは、それを眼前に目撃することがなかつたからではない。否彼は餘りにそれに接しすぎてゐて、適當の距離を有しなかつた。然るに今や山から遠ざかつ

たので、その山が見えてきたのである。

彼は市立音楽堂の音楽會に臨んでゐた。その場所は、珈琲卓子の十二列並んだ廣間で、二三百人の聴衆だつた。奥に舞臺があつて、其處に管絃樂隊が控へてゐた。クリストフのまはりには、薄黒い長い上衣をきちつと纏つた將校連中——髯を剃つた、赤い、眞面目な、俗氣たつぶりの、大きな顔、それから、例の誇張癖を發揮して、盛んに談笑してゐる、貴婦人達、俗れから、齒並をすつかりむき出した微笑み方をする、小さな令嬢達、それから、髯と眼鏡との中に潜み込んで、眼の圓い人の好い蜘蛛に似てゐる、大男達、彼等は健康を祝して杯を擧げる度毎に、椅子から立ち上つてゐた。さういふ行ひを、宗教的な敬意をこめてやつてゐた。その瞬間には、彼等の顔付も音調も變つた。彈撒でも唱へてるやうな調子で、奠酒を捧げ合ひ、聖杯を飲み干し、莊嚴と滑稽との交つた様子をしてゐた。音楽は、談話と皿音との間に、打ち消されてゐた。それでも皆、つとめて低聲に話しひそかに食べてるのであつた。音楽長は、背の曲つた大きな老人で、白髯を尻尾のやうに頤に垂れ、振り返つた長い鼻をし、眼鏡をかけ

て、博言學者のやうな風采だつた。——凡てそれらの類型的人物を、クリストフは久しい以前から見馴れてゐた。然しその日は（何故だか自ら分らなかつたが）、やゝもすればそれらを漫畫視しがちであつた。さういふ風に、人物や事物の奇怪な有様が、平素は氣付きもしないのに、別に何といふ理由もなく、突然眼についてくるやうな日が、往々あるものである。

管絃樂の番組には、エグモントの序樂、ワルトトイフェルの輪舞曲、タンホイゼルのローマ巡禮、ニコライの陽氣女の序樂、アタリーの宗教行進曲、及び、北極星といふ幻想曲、などが含まれてゐた。管絃樂は、ベートーヴェンの序樂を正確に演奏し、それから輪舞曲を猛然と演奏した。タンホイゼルの巡禮が奏されてる間に、酒瓶の栓を抜く音が聞えた。クリストフの隣の卓子に坐つてゐた大男が、陽氣女の節を取りながらフルスタッフの身振りをした。空色の長衣を着、白い帶をしめ、獅子鼻に金の鼻眼鏡をかけ、腕の赤い、胴の大きな、肥満した老夫人が、シューマンとブラームスとの二三の歌唱曲を、しつかりした聲で歌つた。彼女は、眉をつり上げ、横目を使ひ、瞬きをし、左右に頭をうち振り、月のやうなその顔に、氷りついた大きな微笑を浮べ、また、彼女のうちに輝き出してる厳格な正直さがなかつたら、寄席珈琲店を時々偲ばせるやうな、大袈裟な身振を盛んにやつた。一家の母親たる彼女は、熱烈な娘や青春や情熱などを演じたのである。かくてシューマンの詩は、育兒院めいた

無趣味な匂ひを帯びてきた。聴衆は歡喜してゐた。——然し、「南ドイツ人合唱團」が現はれた時、聴衆の注意は嚴肅になつた。彼等は感傷に満ちた種々の合唱曲を、順次に囁いたり喚いたりした。四十人の人員で、四部合唱をやつてゐた。宛もその演奏から、本來の合唱的特色を悉く、除き去らうと努めてるかと思はれた。大太鼓を叩くやうな急激な大聲を交へながら、細かな旋律的效果を、内氣な涙つぽい細やかな氣分を、息も絶えぐの最弱音の調子を、狙つたものであつた。圓滿と平衡との缺如であり、甘つたるい様式であつた。宛もポツトムの言葉通りだつた。

「——私に獅子の役をやらして下さい。雖に餌をやる女鳩のやうに、私はやさしく吼えてみせます。驚かと思はれるやうに、私は吼えてみせます。」

クリストフは、その初めから耳を傾けながら、次第に呆氣にとられてきた。さういふものは、彼にとつては少しも珍らしいものではなかつた。それらの音樂會、管絃樂隊、聴衆、それを彼はよく知つてゐた。所が今俄に、その凡てが嘘であるやうに思はれた。凡てが、最も好んでゐたもので、エグ、モントの序樂までが。その莊麗な混亂と正確な動亂とが、今は誠實を缺いてるかやうに彼の氣色を害した。勿論彼が聞いたのは、ベートーヴェンやシニエマ

ンではなく、その滑稽な中介者等であり、その鵜呑にしたがつてる聴衆であつて、彼等の濃厚な馬鹿さ加減は、重々しい雲のやうに作品のまはりに立ち罩めてゐた。——なほまた包まらず云へば、作品の中にも、最も立派な作品の中にさへも、クリストフがまだ嘗て感じたことのない、或る不安なものが籠つてゐた。……一體それは何であるか？ 彼は愛する大家を論議することの不敬を考へて、それを敢て分析して考へることが出求なかつた。然しいくら見まいとしても、それが眼についた。そして心ならずも見續けてゐた。ビザのヴェルゴ、ニョザのやうに、指の間から覗いてゐた。

彼は赤裸なドイツ藝術を見た。凡ての者が——偉大な者も愚かな者も——一種感傷的な慙懣さで自分の魂を披瀝してゐた。情熱が溢れ、高尚な道徳心が滴り、心をこめて夢中に感情が吐露されてゐた。恐るべきゼルマン多感性の水門が、切つて放たれてゐた。その多感性は強者の元氣を稀薄にし、弱者を灰色の水の下に溺らしてゐた。一の汎濫であつた。ドイツの思想がその底に眠つてゐた。而も、メンデルスゾーン式の、ブラームス式の、シューマン式思想は、また引續いては、誇張的な空想的な歌唱曲の、ちつぽけな作者達一團の思想は、往々にして何といふ下らないものであつたか！ 皆砂で出来てゐた。一の岩もなかつた。濕つた怪しげな土器であつた。——それらは皆、如何にも下らない幼稚極まるものだったので、

屢々クリストフは、全聴衆がそれに喫驚してゐなからうとは、信じ得られないほどだつた。所がまはりを眺めると、安泰さうな顔付ばかりだつた。聞いているのは美しい曲ばかりである。またそれから愉快が得られるに違ひないと、前以て思ひ込んでしまつてゐたので、彼等はどうして、自ら批判を下すことならんかを爲し得たであらう？ 彼等はそれら神聖な大家の名前に對して、滿腔の尊敬を捧げてゐた。彼等の尊敬しないものは何があつたらう？ その番組に對しても、酒杯に對しても、自分自身に對しても、みな恭々しかつた。近くとも遠くとも、自分に關係のあるものに對して皆は、「閣下」の尊稱を頭の中で與へてるやうに思はれた。

クリストフは交る代るに、聴衆と作品とのことを考へてゐた。宛も庭の飾り球のやうに、作品は聴衆を反映し、聴衆は作品を反映してゐた。クリストフは笑ひ出したい氣持ちになつて、顔を擧げた。それでもなほ我慢してゐた。けれども「南ドイツ人」の一團が現はれて、戀に落ちた若い娘の氣恥しい告白を、堂々と歌ひだした時には、もう堪へられなかつた。彼は放笑した。憤りの叱聲が起つた。隣席の人々は驚いて彼を眺めた。それらの憤慨した善良な顔を見ると、彼は愉快になつた。彼は益々笑ひ、笑ひ續け、涙を出して笑ひこけた。それには人々も怒つた。「出る！」と人々は叫んだ。彼は立ち上り、こみ上げてくる大笑ひに背中

を震はしながら、肩を聳かして出て行つた。その退席は人々の憤慨を招いた。それが、クリストフとその町との間の敵意の初まりであつた。

* * *

右の經驗の後で、クリストフは家に歸ると、「神聖なる」音楽家等の作品を読み返して見た。そして、自分が最も愛してゐた楽匠中にも、「嘘」をついてゐる者のあるのを認めて、彼はうち驚いた。初めはそれを疑はうとつとめ、自分の誤解だと思はうとつとめた。——否、どうしても駄目だつた。……一大國民の藝術的至實を拵へてゐる、凡庸と虚偽との量に、彼は驚かされた。よく調べたら、残る頁は如何に僅少な事だつたらう！

それ以來彼は、敬愛してゐた他人の作品を読むにも、もはや懸念に胸を震はさざるを得なかつた。……實に彼は妖惑されてゐるがやうだつた。何物にも同じやうな不満ばかりだつた。或る楽匠に對しては、斷腸の思ひをした。愛する友を失つたがやうなものだつた。全く信頼しきつてゐた友から數年來欺かれてゐたことに、突然氣付いたがやうなものだつた。それを彼は泣いた。もう夜も眠れなかつた。絶えず苦しんだ。自ら自分を咎めた。もう自分には判

斷が出来なくなつたのか？ 自分は全く馬鹿になつてしまつたのか？……否々、晴れやかな日の麗はしさは、いつもよりずつとよく眼にはひつた。人生の見事な豊富さは、いつもよりずつと鮮かになつかく感ぜられた。彼の心は少しも彼を欺いてはゐなかつた……。

なほ長らく彼は、自分にとつて最も立派な人々、最も純粹な人々、聖者中の聖者とも云ふべき人々、さういふ樂匠には敢て手を觸れなかつた。彼等に對して懐いてる信仰が、傷つけられはすまいかと恐れてゐた。然しながら、最後まで突進して、たとひ苦しみを受けやうとも、事物の真相を見極めんと欲する、勇敢誠實な魂の假借なき本能には、どうして抵抗することが出来やう？——で彼は遂に、神聖なる作品を披いた。最後の豫備隊、近衛兵、をもくり出した。……そして一見すると、それらもやはり他の作品と同じく無^む理^りではな^ないことを、彼は氣付いた。彼は讀み續けるだけの勇氣がなかつた。時々、讀み止めては本を閉ぢた。ノアの息子のやうに、彼は父親の裸體にマントを投げかけたのであつた……。

やがて彼は、それらの廢墟の中に困憊して佇んだ。彼は自分の神聖な幻影に手を當てるよりも寧ろ自分の片腕を失ふ方が好ましかつた。心の中の死の悲しみだつた。然し彼のうちには強い氣力と回春の生命とが宿つてゐたので、藝術に對する彼の信頼の念は、殆んど動搖されなかつた。青年の一向^{ひたすら}な自負心を以て、宛も自分より前には誰も生きた者がないかの

やうに、再び生活を開始した。生きてる熱情と、藝術がそれに與へんとつとめた表現との間には、殆んど例外なしに何等の關係もないといふことを、彼は自分の新らしい力に酔ひながら感じてゐた——恐らく理由がないでもなかつたらうが。然し彼が、自らそれらを表現した時、よりうま^うま^まくより眞實にやれたこと、思つたのは、誤りであつた。彼はまだそれらの熱情に滿されてゐたので、自分の書いたものうちにそれらを見出すのは容易であつた。けれども彼以外の他人には、彼が使つたやうな不完全な彙語の下にそれらを認知し得る者は、一人もなかつたであらう。彼が非難した多くの藝術家に就ても、同様であつた。彼等は皆、深い感情を懐きそれを表現した。然し彼等の用ゐた言葉の秘訣は、彼等と共に死んでしまつたのである。

クリストフは少しも心理學者ではなかつた。それらの理由からは少しも困らされなかつた。自分にとつて亡びたものは、永久に亡びたものとなるのであつた、彼は青春の自信深い強烈な不正さを以て、過去に對する自分の批判を一々點檢した。彼は最も高尚な魂をも赤裸になして、その滑稽な點を無慈悲に抉出した。メンデルスゾーンのうちには、あり餘つた憂愁、氣取つた幻想、空虚な思想、などがあつた。ウーベルには、硝子細工や金びか、心の乾燥、頭的情緒。リストは、氣高い長老で曲馬師で新古典派で香具師、實際の氣高さと偽りの

氣高さと同分量の混合、晴朗な理想と厭味な老練さとの同分量の混合。シューベルトは、無色透明な數千米突の水底に在るかのやうに、多感性の下に蹲つてゐるのであつた。その他、英雄時代の古人、半神、豫言者、教會の長老、皆クリストフの批評を免れなかつた。數世紀に跨り己のうちに過去未來を包括してゐる、偉人セバステアン——バッハでさへも、虚偽や世流の愚劣さや小學校式の饒舌、などを具へて居ないとは云へないのであつた。神を見たこの人も、神のうちに生きてゐたこの人も、クリストフの眼から見れば往々にして、面白くもない甘つぽい宗教を有し、譎詐浮華な様式を事としてゐるのであつた。その歌謡曲のうちには、戀に陥り夢中になつてゐる憔悴の曲調があつた——（嬌態の魂とクリストフとの對話）——クリストフはそれに胸を悪くした。圓い足を出し輕羅を襲かした豊頬の天使を、彼は見るやうな氣がした。それにまた、この天才的な大巨匠はいつも閉め切つた室の中で書いてたやうに、彼には感じられた。幽閉の感じが漂つてゐた。恐らく音楽家としては劣つてゐたらうが、然し人間としてはすつと優れた——すつと人間的な——他の人々に、例へばベートーヴェンやヘンデルなどにあるやうな、外界の強い空氣の流れが、その音楽の中には存してゐなかつた。またクラシックの作家等のうちで彼の氣色を害したことは、自由の缺乏であつた。彼等の作品中では、殆んど凡てが「組立て」られたものであつた。或は、月並な音樂的修辭法で誇張されて

る情緒があり、或は、機械的な方法でくり返されこね廻され四方に結びつけられてゐる、簡単な節奏が、裝飾的意匠があつた。それらの對照的な冗複な構造——奏鳴樂や交響樂——は、廣大精巧な設計や端整さなどの美に當時餘り敏感でなかつたクリストフを、憤激させるのであつた。彼にはそれらが、音楽家の仕事といふより寧ろ左官屋の仕事のやうに思はれた。

彼はまた、ロマンチックの作家等に對しても、決して峻嚴さを減じなかつた。不思議なことには、そして彼自身眞先に驚いたことには、——最も自由であり、最も自發的であり、最も建築的でない、自稱してゐた（實際にさうであつた）音楽家ほど——例へばシューマンのやうに、無數の小曲のうちに、自分の全生命を、一滴づゝまた一刻毎に注ぎ込んだ人々ほど、彼を苛ら立たせるものはなかつた。彼は、自ら脱却しようと誓つた自分の少壯な魂やあらゆる稚氣を、彼等のうちにもやはり見出しただけに、猶更憤激した。固より誠實なシューマンは、虚構を以て難ぜられる筈はなかつた。然し、丁度シューマンの例によつてクリストフが理解するに至つたことは、ドイツ藝術の最も悪い虚構は、その藝術家等が少しも實感しない感情を表現しようとしたから起つたといふより、寧ろ彼等が、實感する感情——而もそれは嘘の感情であつた——を表現しようとしたから起つたといふことであつた。音楽は魂の假借なき鏡である。ドイツの音楽家にして、卒直で信實であればあるほど、益々彼が示す所の

ものは、ドイツ魂の弱點であつて、不安定な根柢、柔情な多感性、淡懷の缺除、多少狡猾な理想主義、自己を見また敢て自己を正視することの不可能性、などであつた。この誤れる理想主義は、最も偉大な人々の——例へばワグネルの、急所であつた。その作品を読み返しながら、クリストフは齒軋りをした。ロー、ヘン、グリンは、罵倒すべき虚偽の作であるやうに思はれた。その下卑た騎士道、偽善的な勿體振、好んで己を讚美し己を愛する我利冷酷な徳操の化身とも云ふべき、恐怖も知らないが人情も知らないその英雄、それを彼は憎み嫌つた。自分の面影を崇拜し、その神聖さに對しては他人を犠牲にしても顧みない、美貌で完璧で嚴酷なる、かゝるドイツのフアリサイ型人物を、彼はよく知りすぎてゐ、實世間に見たことがあつた。飛びゆくオランダ人は、その重々しい感傷性と陰鬱な倦怠とで、彼の心を壓倒した。四部曲の野蠻な頹廢的人物は、戀愛に於て堪らないほど空粗だつた。妹を奪つてゆくジグムントは、客間式の哀歌を男聲高音で歌つた。神々の黄昏中のジグフリートとブリュンヒルデとは、ドイツの立派な夫妻として、互の眼に、特に公衆の眼に、浮華饒舌な夫婦の情熱を盛んに見せつけた。それらの作品中には、あらゆる種類の虚偽が集つてゐた、嘘の理想主義、嘘のキリスト教、嘘のゴチ、ク主義、嘘の傳説味、嘘の神性味、嘘の人間味などが、あらゆる因襲を覆すものとせられてゐるその劇ぐらゐ、巨大な因襲を振りかざしてゐるものはなかつた。

眼も精神も心も、片時なりとそれを欺かれる筈はなかつた。進んで欺かれようと思はない限りは欺かれなかつた。——所が人々の眼や精神や心は、欺かれることを望んでゐた。ドイツは、その老耄にして幼稚な藝術を、解き放された畜生と勿體ぶつゝ氣取りやの小娘との藝術を、大に歡び楽しんでゐた。

そしてクリストフ自身と雖も、如何とも出来なかつた。彼はさういふ音樂を聞くや否や、他人と同じく、他人よりもつと甚しく、作者の解放する急湍と惡魔的な意志とから、囚へられてしまふのであつた。彼は笑つた。彼はうち震へた。彼は頬を熱らして、騎馬の軍隊が自分のうちを通るのを感じた。さういふ暴風を己のうちに持つてゐる人々には、凡てが許されてゐると考へた。もはやうち震へながらしか繕くことの出来ない神聖な作品のうちに、愛してゐたものゝ純潔さを何物にも曇らされることなく、昔と同じ激しい熱情を再び見出す時、如何に彼は喜びの叫びを立てたことであらう！ それらは、彼が難破から救ひ上げた光榮ある殘留品だつた。何たる幸福ぞ！ 自分自身の一部を救ひ出したがやうに、彼には思へた。そして實際、それは彼自身ではなかつたであらうか？ 彼が憤激して非難したそれらドイツの偉人は、彼の血、彼の肉、彼の最も貴い存在、ではなかつたであらうか？ 彼が彼等に對してあれほど峻厳だつたのは、自分自身に對して峻厳だつたからである。彼以上に彼等を愛し

たものがあつたらうか？ シューベルトの善良さ、ハイドンの無邪氣さ、モツァールの愛情、ベートーヴェンの勇壯偉大な心、それを彼以上によく感じたものがあつたらうか？ ウェーベルの森の戦ぎの中に、または、北方の灰色の空に、ドイツ平原の上遙かに、石の山や透彫矢形を持つた巨大な塔を峙てゐる、ジャン・セバスチアンの大殿堂の大きな影の中に、彼以上に敬虔な情を以て身を置いた者があつたらうか？——然しながら彼はまた、彼等の虚偽を苦しんでゐた。それを忘れることが出来なかつた。そして彼は、彼等の虚偽を民族に歸し、彼等の偉大さを彼等自身に歸したのであつた。彼は間違つてゐた。偉大な點も弱點も、等しく民族に屬するものである。この民族の力強い混沌たる思想は、音楽や詩の大河となつて逆巻き、全ヨーロッパはその河水を飲みに来るのである。……そして彼は、今彼をしてかくも峻烈に民衆を非難せしめてゐる卒直な純眞さを、他の如何なる民衆のうちに見出し得たであらうか？

彼はそれらのことに少しも氣付かなかつた。駄々つ兒の恩知らずな心持ちを以て、彼は母親から稟けた武器を母親に差向けてゐた。後になつて、後になつてこそ、彼は初めて感ずるに違ひない、母親に負ふ所が如何に多いかを、自分にとつてその母親が如何に貴いものであるかを……。

然し彼は今や、己の幼年時代の偶像に對する盲目的な反動の時期に在つた。彼はそれらの偶像を憎み、また自分が夢中になつて信仰したことを、偶像に向つて怨んでゐた。——そして彼がさうあるのはいゝことであつた。生涯の或る年代に於ては、敢て不正であらなければいけない。注入されたあらゆる讚美とあらゆる尊敬とを塗抹し、凡てを——虚偽をも眞實をも——否定し、自ら眞なりと認めない凡てのものを、敢て否定しなければいけない。年若き者はその教育によつて、また周囲に見聞きする事柄によつて、人生の本質的な眞實は混交してゐる虚偽と痴愚との極めて多くの量を、己のうちに吸ひ込むが故に、健全なる人たらんと欲する青年の第一の務めは、凡てを吐き出すことに在る。

*

*

*

*

クリストフはこの頑健な嫌惡の危機を通つてゐた。自分の存在を閉塞してゐる不消化物を、彼は本能に驅られて排出してゐた。

先づ第一に、濕つた微臭い地下室からのやうに、ドイツ魂から滴つてゐる、胸悪くなる多感性があつた。光りよ、光りよ！ 荒い乾いた空氣で一掃しなければいけないかつた、沼澤の毒

氣を、ゼルマン魂が無盡蔵に漲つてゐる、雨滴のやうに繁き歌唱曲や小曲の、白茶けた臭氣を。それらのものは無數にあつた、慾望、郷愁、跳躍、願ひ、いかなれば？ 月に、星に、鶯に、春に、太陽の光りに、春の歌、春の快樂、春の會釋、春の旅、春の夜、春の使ひ、愛の聲、愛の言葉、愛の悲しみ、愛の精、愛の圓滿、花の歌、花の文、花の會釋、心の痛み、吾が心重し、吾が心亂る、吾が眼は曇る、または、小薔薇や小川や雉鳩や燕などの、卒直樸訥な對話——野薔薇に刺がなかりせば、——老いたる良人と共に燕は巢を作りしならば、或ひは、近頃燕は婚約したりしならば、——凡てそれらの、空粗な愛情、空粗な情緒、空粗な憂愁、空粗な詩、などの漲溢……。如何に多くの美しいものが俗化され、如何に多くの稀なるものが、あらゆる場合に故もなく使ひ古されてることだらう！ 最も悪いのは、凡てそれらのものが無駄になつてることであつた。それは公衆に己の心を開き示さんとする習癖であり、やかましく意中を吐露せんとする、善良なドイツ人等の態とらしいつまらない性癖であつた。云ふべきこともないのに常に口を利いてゐた。その饒舌はいつまでも止まないのか？——これ、沼の蛙共黙らないか！

クリストフが更にまさしくと虚偽を感じたのは、殊に戀愛の表現中にであつた。なぜなら、茲に在つては一層よくそれを事實に比較し得る地位にあつたから。涙つぽい几帳面な戀

歌の因襲は、男の慾望にも女の心にも、何等一致してゐるものがなかつた。けれどもそれを書いた人々は、少くとも一生に一度は戀をしたことがあるに違ひなかつた。然らば彼等はさういふ風に戀したのであつたらうか？ 否、否、彼等は嘘をつき、例の通り嘘をつき、自分自身に向つて嘘をついたのだ。彼等は自分を理想化せんと欲したのである。理想化するといふ意味は、人生を正視することを恐れ、人間のうちに在る事柄を、その在るがまゝに見得ない、といふことであつた。——到る處に、同じ憶病さ、男らしい淡懷さの同じやうな缺除。到る處に、愛國心の中にも、飲酒の中にも、宗教の中にも、冷淡に對する同じ心酔、浮華虚構な同じ嚴肅さ。飲酒の歌は皆、酒や杯に對する擬人法であつた、「汝、尙き杯よ……」と。信仰——最も自發的なものたるべき、不意の突然な波濤のやうに魂から迸り出るべき、唯一のものである——は、一の拵へ物であり、一の通用品であつた。愛國の歌は、程よく鳴いてる従順な羊の群のために拵へられたものであつた……。——さあ怒號してみないか！……なんだ、なほ嘘を云ひ續けるのか——理想化し續けるのか——陶醉に於ても、殺害に於ても、狂愚に於てまでも！……

クリストフは遂にあらゆる理想主義を憎むに至つた。さういふ虚偽よりも磊落な粗暴の方がまだ好ましかつた。——根本に於ては、彼は誰よりも理想主義者であつて、寧ろ好ましい

と思つたそれら粗暴な現實主義者こそ、彼の最も忌むべき敵であつた——ある筈であつた。

彼は自分の熱情に眼を眩まされてゐた。霧のために、貧血症に罹つてゐる虚偽のために、「太陽のない幽鬼的觀念」のために、凍らされたやうな氣がしてゐた。彼は一身の力を搾つて太陽を仰望してゐた。周囲の偽善に對する、或は彼が偽善と名づけてゐるものに對する、年少氣鋭な輕蔑心の餘りに、民族の高き實際的智慧が眼に映じなかつた、この民族は、己の野蠻なる本能を統御せんがために、もしくはそれを利用せんがために、次第にその壯大な理想主義をうち立てたのであつた。「民族の魂を變形し、それに屢々新しい性質を有せしむるものは、專斷な理性でもなく、道德及び宗教の規範でもなく、立法家及び爲政家でも、牧師及び哲學者でもない。それは、生きんと欲する民衆を生命のために鍛へる不幸艱難の幾世紀の所産である。」

*

*

*

*

その間もクリストフは作曲してゐた。そして彼の作は、彼が他人に非難するその缺點から免れてはゐなかつた。なぜならば、彼に在つては創作は止むに止まれぬ要求であつて、その

要求は理知が提出する規則に服従しはしなかつた。人は理性によつて創造するのではない。必然の力に驅られて創造するのである。——次に、多くの感情に固有な虚偽や誇張を認めるだけでは、それらにまた陥るのを免れるものではない。長い困難な努力が必要である。怠惰な習慣の時代相傳の重層的な遺産を持ちながら、現代の社會に於て、全く眞實たらんとすることは最も困難である。多くは沈黙を守るが最上の策であるにも拘らず、己の心を絶えず饒舌らしておく不謹慎な病癖を持つてゐる人々や民衆にとつては、眞實たることは殊に容易でない。

この點については、クリストフの心は極めてドイツ的であつた。彼はまだ沈黙の美德を知つてゐなかつた。その上、それは彼の年齢にもふさはしくなかつた。彼は饒舌りたい欲求を、而も騒々しく饒舌りたい欲求を、父から受け繼いでゐた。彼はそれを意識して、それと争つてゐた。然しこの争ひは彼の力の一部は麻痺してゐた。——また彼は、祖父から受け繼いだ遺傳と争つてゐた。それも亦同じく厭な遺傳で、自己を正確に表現することの極端な困難さであつた。——彼は技能の兒であつた。技能の危険な魅力を感じてゐた——肉體の快樂、巧妙さや輕快さやまたは筋肉の活動力を満足させることなどの快樂、己の一身を以て數千の聽衆を征服し眩惑し支配するの快樂。それは年若き者に在つては、極めて宥恕すべきまた殆

セ〇二
んど罪なき快樂ではあるが、然し藝術と魂とにとつては、致命的なものである。——クリストフはその快樂を知つてゐた。それを血液に持つてゐた。それを輕蔑してはゐたが、やはりそれに打負けてゐた。

斯くて、民族の本能と天分の本能との間に引き合はれ、身内に喰ひ込まれて振り拂ふことの出来ない、遊惰な過去の重荷に壓せられて、彼は躓きながら進んでいつた。そして自ら排斥してゐたものに思ひの外接近してゐた。當時の彼の作品は悉く、眞實と誇張との、明敏な氣力と逆せ上つた愚蒙との、混合であつた。彼の性格が、己の運動を拘束する故人の性格の外被を、漸くつき破ることが出来るのは、ごく時々にし過ぎなかつた。

彼はたゞ一人であつた。彼を助けて泥濘から引出してくれる案内者は居なかつた。彼は泥濘から外に出たと思つてゐる時に、益々それに落込んでゐた。不運な試作に時間と力とを濫費しながら、摸索しつゝ進んでいつた。如何なる經驗をも嘗めつくした。そしてかゝる創作的煩悶の混亂中に在つて、彼は己の創作する凡てのものうちで、何れが最も價值あるかを知らなかつた。無稽なる計畫の中で、哲學的主張と極端な廣大さとを有する交響樂的な詩の中で、途方にくれた。然しそれに長く係り合ふには、彼の情神は餘りに誠實だつた。そして彼はその一部分をも草案しないうちに、嫌惡の情を以てそれを投げ捨てた。或はまた、最も取扱ひ

難い詩の作品を、序樂の中に譯出しようと思つた。すると自分の領分でない世界の中に迷ひ込んだ。また、自ら演劇の筋を立てゝみることもあつたが——（彼は何物に對しても狐疑しなかつたのである）——それは馬鹿げきつたものであつた。また、ゲーテやクライストやヘッベルやシュークスピヤーなどの大作を攻撃する時には、全くそれを曲解してゐた。知力が缺けてゐたのではなかつたが、批評的精神が缺けてゐたのである。彼はまた他人を理解し得なかつた。餘りに自分自身に心を奪はれてゐた。彼が到る處は見出したものは、自分の卒直な誇張的な魂を具へてゐる自分自身であつた。

それらの全く生きる術のない怪物の外に、彼は多くの小さな作品を書いてゐた。折にふれての情緒を直接に表現したもの——凡てのうちで最も永存すべきもので、音樂的感想、即ち歌唱曲であつた。この場合にも他と同じく、彼は世流の習慣に對して熱烈な反動をなしてゐた。既に音樂に取扱はれた最も有名な詩を取り上げて、シューマンやシューベルトなどゝ異つた而もより眞實な取扱方を、傲慢にも試みようとしてゐた。或は、ゲーテの詩中の人物、例へばウイルヘルム・マイスタル中の堅琴手ミグノンなどに、その簡明にして混濁せる個性を與へようとつとめた。或は、藝術の力弱さと聽衆の無趣味とが、暗々裡に一致して、いつも甘つばい感傷で包み込んでゐる、或る種の情歌を攻撃した。そしてその衣を剥ぎ取り、粗野な

肉感的な生氣を吹き込んだ。一言にして云へば、熱情や人物を、それ自身のために生きさせようと思へ、日曜日毎に麥酒亭ビヤガゼンに集つて安價な感動を求めてゐる、ドイツ家族等の玩具になるために、それらを生きさせようとはしなかつた。

然し彼は普通、詩人等を餘りに文學的だと考へてゐた。そして彼は、最も單純な原文を、嘗て教訓本の中で讀んだことのある、古い歌唱曲ソングの原文を、氣の利いた古い小唄の原文を、好んで探し求めた。彼はその合唱的性質を存続させまいと用心した。大膽なるまでに通俗な自由な生々とした方法で取扱つた。其他彼が取上げたものは、福音の言葉、もしくは諺、時としては、通りがかりに耳にした言葉、普通の會話の斷片、子供の考へ、——大抵は拙い散文的な文句ではあるが、然し全く純なる感情がその中に透し見られるものだつた。斯かるものになると、彼は樂々とやつてのけた。そして、彼の他の作品に見られない、また彼自身少しも氣付かないでゐる、一種の深みに到達してゐた。

彼の作品には、よいものも悪いものもあり、大抵はよいものより悪いものの方が多かつたが、その全體に就て云へば、生命が溢れてゐた。それでも凡て新らしいものではなかつた、新らしい所ではなかつた。クリストフは、却つて誠實のために屢々平凡だつた。既に用ゐられてゐる形式をくり返すことがよくあつた。なぜなら、それは彼の思想を正確に現はしてゐた

し、また彼はさういふ感じ方をしてゐて、異つた感じ方をしてゐなかつたからである。彼は少しも獨創的ならんことを求めなかつた。獨創的ならんと斷言するのは凡庸なるが故である、と彼には思へた。彼は自分自身ならんことを努め、實感してゐることを未はんとなつて、自分の云ふことが既に前に云はれてゐやうとゐまいと、それを少しも氣にしなかつた。而もそれは却つて獨創的たる最上の方法であることを、またジャン・クリストフは過去未來を通じてただ一度しか存在しないといふことを、彼は傲慢にも信じてゐた。青春の壯大なる不遠慮さを以て彼は、まだ何物も出來上つたものはないやうに思つてゐた。凡てが作り上げるべき——もせりは作り直すべき——ものやうに、彼には思へてゐた。内部充實の感情は、前途に無限の生命を有するといふ感情は、過多なやゝ不謹慎な幸福の状態に彼を陥れてゐた。絶えざる喜悅、それは喜びを求めるともなく、また悲しみにも調和し得てゐた。その源は、あらゆる幸福と美德との母である、生命の過剰の中に、力の中に在つた。生きること、餘りに生きること！……この力の陶酔を、この生きることの喜悅を、自分のうちには——たとひ不幸のどん底にあらうとも——全く感じない者は、藝術家ではない。この喜悅は試金石である。眞の偉大さが認められるのは、喜びや苦しみのうちにも喜悅することの出來る力に於てである。メルデルスゾーンやブラームスの輩は、小雨や十月の霧などの神たる輩は、かゝる崇高なる

力を嘗て知らなかつたのである。

クリストフはその力を自分のうちに感じてゐた。そして不遠慮な卒直さを以て、自分の喜びを見せつけてゐた。少しも悪意があるのではなかつた。他人とそれを共にすることをしか求めてはゐなかつた。然しその喜びをいつまでも持ち得ず而も常に羨むことを止めない、大多数の人々にとつては、それは癢に障るものであるといふことを、彼は氣付かなかつた。その上彼は、他人の氣に入らうと入るまいと平氣であつた。彼は己を確信してゐた。自分の信する所を他人に傳ふること——征服すること——は、譯もないことのやうに思はれた。我知らず彼は、樂譜製造人等一般の貧弱さに、自分の豊富さを比較してゐた。そして自分の優秀なことを認めさせるのは、極めて容易なことだと考へてゐた。容易すぎる位だつた。己を示さへすればよかつた。

彼は己を示した。

人々が彼を待つてゐた。

クリストフは自分の感情を勿體ぶつて隠しはしなかつた。事物をあるがまゝに見ようとするやうに欲しないドイツの虚偽を悟つて以來、彼は、作品や作家の如何なる定評をも顧慮する所なく、あらゆるものに對して、絶對的な一徹な不斷の誠實を事とするのを、一の掟としてゐた。そして彼は何をすることも極端に走らざるを得なかつたので、矯激にまで陥つていつた。法外なことを云つては、彼よりも遙かに卒直でない人々を憤慨せしめた。彼はこの上もなく卒直であつた。宛も價値を絶する大発見を一人胸に秘めたく思はない者のやうに、彼はドイツの藝術に對する自分の考へを、誰構はずに洩らしては満足してゐた。そして對手の不滿を招いてゐるとは想像だもしなかつた。定評ある一作品の愚劣さを認めると、もうそのことで頭が一杯になつて、出逢ふ人毎に、管絃樂隊の樂手と素人の知人とを問はず、誰にでも急いでそれを云つて聞かした。顔を輝がしながら最も暴慢な批評を述べ立てた。最初人々は、彼の云ふことを本氣に受取らなかつた。彼の氣まぐれを一笑に附した。然しやがて彼が厭に執拗に餘り屢くり返すのを、氣付くに至つた。クリストフがそれらの僻論を信じてゐることは、明かになつた。それに對しては前ほどは笑へなかつた。彼は冒瀆者だつた。演奏の最中に騒々しい嘲弄を示したり、或は光榮ある樂匠等に對する輕蔑を、如何なる場所をも憚らずに述べ立てた。何事も皆小さな町中に傳はつた。彼の一言も取落されはしなかつた。人々は既に、前年の

行ひについて彼を憎んでゐた。アーダと一緒に所を公然と見せつけた破廉恥なやり方や、それに引續いただらしのない頃の事を、彼等は忘れてゐなかつた。彼自身はもう覚えてはゐなかつた。日は日を消してゆき、今の彼は二ヶ月以前の彼とは非常に距つてゐた。然し他人は彼のためにそれを覚えてゐた。あらゆる過失を、あらゆる缺點を、隣人に關する悲しい醜い不面目なあらゆる出来事を、一つも消え失せないやうにと細かく書き立て、それを社會的職務としてゐる人々が、凡ての小都市に存在してゐる。クリストフの新らしい矯激な行ひは、昔の行ひと相並んで、彼の名義で帳簿に書きのせられた。兩者は互に照合し合つた。道徳を傷つけられた怨恨に、善良な趣味を潰された怨恨が加はつた。最も寛大な人々は彼のことをかう云つた。

「わざと變つた眞似をしたがつてるんだ。」

然し大多數の者は斷言した。
「全く狂人だ。」

それと同じく苛酷な而も一層危険な風評が——高貴の所から出ただけに効果の多い風評が——擴がり初めた。それは次のやうなことだつた。……クリストフはなほ續けて、公務のために規則正しく宮廷へ伺候してゐたが、其處でも例の惡趣味を出して、親しく大公府の面

前で、世に尊敬されてる樂匠等について、聲望すべき不作法な言辭を弄してゐた。メンデルスゾーンのエリアスを、「まやかし坊主の祈禱」と呼び、シューマンの或る種の歌唱曲を「小娘の音楽」と見做した。——而もそれは、貴顯の方々がそれらの作品を好んでゐると仰せられた時にである！ 大公府はその不禮な言葉を片付けるために、冷かに云はれた。

「お前の云ふことを聞いてゐると、それでもドイツ人かと疑はれることがあるよ。」

さういふ高い所から落ちてきたこの復讐的な言葉は、ごく低い所まで轉り落ちずにはゐなかつた。クリストフが成功を博してるといふ理由から、或は別に峻烈でなくとも一層個人的な理由から、彼に對して遺恨の種があるやうに思つてゐる人々は皆、實際彼は純粹なドイツ人ではないといふ事を、思ひ起さずにはゐなかつた。父方の家は——讀者の記憶する通り——ベルギーの出であつた。それからといふものは、この移住者が國家的光榮を誹謗するのは別に驚くにも當らないことゝなつた。右の事實は凡てを説明するものであつた。そして、ゼルマン式自尊心は、益々己を尊むと共に敵を輕蔑するの理由を、其處に見出したのであつた。

全然理想的なその復讐に對して、クリストフは自分から、益々よい材料を提供していつた。自分が將に批評に止せられようとしてゐる時に、他人を批評するくらゐ無謀なことではない。

より多く巧みでより少く淡懷な藝術家なら、敵に對して一層の謙讓と尊敬とを示したであら

う。然しクリストフは、凡庸に對する輕蔑と自身の力を信する幸福とを、隠すべき理由を少しも認めなかつた。その幸福の情は餘りに激しく示された。クリストフは幼年時代から、心を打ち明けるべき者が居なかつたので、自分一人で考へ込む癖になつてゐたけれど、最近になると、胸中を披瀝したい欲求に驅られてゐた。自分一人で味ふには餘りに大きな喜びだつた。それを包み込むには、彼の胸では餘りに小さすぎた。他人に喜びを分たないならば、胸は張り裂けるかも知れなかつた。友人がないので彼は、心を打ち明ける者として、管絃樂の同僚で第二樂長をしてゐるジグムント・オックスを選んだ。ウルテムベルヒ生れの青年で、根は善良だが狡猾で、クリストフに溢れるばかりの敬意を示してゐた。クリストフはこの男を疑つてはゐなかつた。もし疑つたにした所で、自分の喜びを、赤の他人にまた敵にまでも打ち明けるのは不都合だと、どうして彼は考へ得たらう？ 彼等は寧ろそれを彼に感謝すべきではなかつたか。彼が努力してゐたのは、また彼等の爲めにでもだつたではないか。彼は友と云はず敵と云はず、萬人に喜びを傳へようとしてゐた。——人々に新らしい幸福を受け容れさせるのは最も困難であることを、彼は少しも知らなかつた。人々は寧ろ古い不幸の方をよしとするだらう。彼等には幾世紀もくり返し嚙みしめてきた食物が必要である。然し彼等にとつて殊に忍び難いことは、その幸福を他人のお蔭で得られるといふ考へである。彼等は

もはや止むを得ない時にしかその侮辱を許さない。そして如何なる場合にも、高價な返報をしてやらうと工夫する。

それ故に、クリストフの打明け話が、誰からも餘り快く迎へられなかつたのは、多くの理由が存してゐた。然し、ジグムント・オックスから快く迎へられなかつたのは、更に一つの理由が存してゐた。第一樂長のトピアス・プイフェルは、遠からず隠退することになつてゐた。そしてクリストフは、年少なのにも拘らず、その後を襲ふべき幸運を悉く有してゐた。オックスは極めて善良なドイツ人であるだけに、クリストフは宮廷の信任を得てゐるのでその地位に相當してゐると、認めてゐた。然し彼は、もし自分の價値が宮廷からもつとよく知られたら、自分の方が一層よく相當してゐると、信するだけの自惚を持つてゐた。それで彼は、クリストフが毎朝、引しめようと努めながらもやはり笑みくずれる顔付をして、劇場へやつて來ると、異様な微笑を浮べてその打明け話を迎へるのであつた。

「どうです、」と彼は通りがかりに狡猾さうに云つた、「何かまた新らしい傑作が出來ましたか？」

クリストフは彼の腕を捉へた。

「あゝ、君、此度のは一番傑れたものだよ……君に聴かしたいな！……いやどうも、餘り立

滅すぎる位だ。まだ嘗て見たこともないほどのものだ。貧しい者が聴けば神の恵みがあらうといふのだ。聴いた後で心に残るのは、たゞもう死にたいといふ考へばかりだ！」

それらの言葉は聴者の耳にははひらなかつた。クリストフはもしその滑稽なことを感じさせられたら、眞先に笑ひ出して詫びたであらうが、そのクリストフを相手にオックスは、微笑みもせず、子供じみた感激を親しく擲^{かまか}揄^うひもせずして、皮肉にも恍惚たる様をした。彼はクリストフを煽て、なほ他の法外なことまでも云はした。そしてクリトフと別れると、それを更に可笑しく誇張して、急いで方々に賣り歩いた。音楽家の狭い仲間では、それをまた盛んに嘲笑した。そして誰も皆、その拙い作品——前以てすっかり判断されてゐた——を判断する機会を、待ちかねてゐた。

遂にその作品が現はれた。

クリストフは自分の多くの作品のうちから、ヘッベルの、ユード、に對する序樂を選んだ。ドイツ人の無氣力に對する反動から、その野蠻な元氣に心惹かれたのであつた。(彼は、ヘッベルが常に如何にもして天才の面影を具へようといふ下心から、虚飾してゐたことを、直覺したので、既に右の作には、多少厭氣がさし初めてゐた。) また、生命の夢といふパールのベックリン式な誇張的題名と、生命は短しといふ題言とのついた、一つの交響樂^{シムフォニー}を添へた。なほ

番組の中には、一聯の彼の歌唱曲と、數種のクラシックな作品と、オックスの祝典行進曲一つとがはひつてゐた。クリストフはオックスの凡庸なことを感じてはゐたが、同僚の誼みから、自分の音樂會にその作品の一つ加へるやうに申し出たのであつた。

稽古中はさしたることもなかつた。管絃樂隊は自ら演奏してゐるそれらの作品を、全然理解しなかつたし、また各自ひそかに、その新しい音樂の奇怪なのに頗る狼狽してはゐたが、然し彼等ははまだ、何等かの意見を立てる隙がなかつた。殊に彼等は、公衆が意見を吐露しないうちは、自分の意見を作ることが出来なかつた。その上、クリストフの自信ある調子は、ドイツのあらゆる善良な管絃樂隊の例に洩れず、規律正しい従順なそれらの音樂家等を、すっかり威壓してしまつてゐた。たゞ困難は、女歌手の方からやつて來た。彼女は市立音樂堂の音樂會に屬する新婦人だつた。ドイツに於て可なり評判の歌手だつた。一家の母親である彼女は、ドレスデンやバイロイトに於て、議論の餘地のない豊富な聲量で、ブリュンヒルデやクントリーの曲を歌つてゐた。然し彼女は、ワグネル派について、その派が當然得意としてゐる技術、即ち、口をぼかんと開いて聴き取れてゐる聴衆に向つて、子音を空間に轉^{まわ}ばし、棍棒で殴りつけるやうに母音を強調しつゝ、立派に發音する技術を、よく學んではゐたにしろ、自然たらんとする技術を學んではゐなかつた——而も故意に。彼女は一語々々に勿體をつけ

た。どの語も強調された。綴りが鉛の靴底をつけて進んでゆき、各文句に一の悲劇が籠つてゐた。クリストフは彼女に、その劇的能力を少し節減してくれと頼んだ。彼女は初めのうち可なり快くそれを努めた。然し生來の愚鈍と聲を出したい欲求とに打ち負けてしまった。クリストフは苛ら立つてきた。自分は生きてる人間に口を利かせようとしたのであつて、大蛇フアネルに話喇叭で喚かせようとしたのではないと、彼はその尊むべき婦人に注意した。彼女はその不禮を——誰も想像する如く——ひどく悪く取つた。彼女は云つた、有難いことには自分は歌ふといふことが何であるかを知つてゐる、樂匠ブラームスの前でその歌唱曲を歌ふの光榮を得たこともある、樂匠はそれを聞いて少しも倦きなかつたと。

「だからなほいけないよ、なほいけないよ！」とクリストフは叫んだ。彼女は、その謎のやうな叫びの意味を説明して貰ひたいと、傲慢な微笑みを浮べながら求めた。彼は答へた、ブラームスは自然さの何たるやを一生涯知らなかつたので、その讃辭は最もひどい非難になるわけであつて、また、自分——クリストフ——は、彼女が丁度認めたと通り、時とすると非常に禮を失することもあるけれど、ブラームスの讃辭ほど彼女にとつて不面目なことを決して云ひはしないと。

議論はさういふ調子で續いていつた。婦人は頑固に、壓倒的な悲痛さと通俗悲劇的な效

果とで自己流に歌ひ續けた。——で遂に或る日クリストフは、もうよく分つたと冷かに云ひ放つた。彼女の天性がさうである以上は、それを矯正することは出来ない。然しこれらの歌唱曲は、正しく歌はれないとすれば、全然歌はれない方がいゝ。もう番組から引きぬいてしまふばかりだと。——それは公演の前日のことであつた。それらの歌唱曲が期待されてゐた。彼女自らその噂をしてゐた。彼女とても相當の音樂家で、その或る長所を鑑賞することは出来たのであつた。クリストフのやり方は彼女にとつて恥辱であつた。そして彼女は、翌日の音樂會がこの青年の名聲を決して高めないだらうとは、確信出来なかつたので、新進の明星と葛藤を結びたくなかつた。で彼女は俄に折れて出た。そして最後の稽古中、クリストフの要求におとなしく服従した。然し彼女は、自分の思ひ通りに歌つてやらう——公演では——と、心をきめてゐた。

*

*

*

*

當日になつた、クリストフは何等の不安をも懷いてはゐなかつた。彼は自分の音樂で餘り頭が一杯になつてゐたので、それを批判することが出来なかつた。自分の作も所々は人の笑

ひを招くかも知れないと、彼はよく知つてゐた。然しそれが彼に何であつたらうか、笑ひを招ぐの危険を冒さなければ、偉大なものは書けない。事物の底に徹するためには、世間體や、禮儀や、廉潔や、人の心を窒息せしむる社會的虚偽に對する懸念などを、敢て蔑視しなければいけない。もし誰の氣をも害せずして成功しようと欲するならば、生澁甘んじて程よき中邊に止まり、凡庸者輩に與へるに、彼等が同化し得るやうな、凡庸な穩便な稀薄な眞理のみを以てするがよい。人生の此方に止つてゐるがよい。然しさういふ心配を足下は踏み踏む時は初めて、人は偉大となるのである。クリストフはそれを踏み越えて進んでいつた。人々からはまさしく悪口されるかも知れなかつた。彼は人々を無關心にはさせないと自信してゐた。多少無謀な某々の頁を聞くと、知り合ひの誰彼がどんな顔付をするだらうかと、彼は面白がつてゐた。彼は辛辣な批評を豫期してゐた。前からそれを考へて微笑してゐた。要するに、盲者——或は聾者——でなければ作品に力が籠つてゐることを否み得まい——愉快なものか或はさうでないか、それはどうでもいゝが、兎に角力があることを。……愉快なもの、愉快なものだ！……力、それで十分だ。力よ、自分の途を進んでゆくがよい、そしてライン河のやうに、凡てを運び去るがよい！……

彼は第一の蹉跌に出逢つた。大公爵が來られなかつた。貴賓席はたゞ、附隨の輩で、數人

の貴顯婦人で占められた。クリストフは暗黙の憤りを感じた。彼は考へた。一大公爵の馬鹿は俺に不平なんだ。俺の作品をどう考へていゝか分らないんだ。間違ひをしやすまひかと恐れてゐるんだ。彼は肩を聳かして、そんなつまらないことは意に介しないといふやうな風をした。所が他の人々はそれによく注意を留めた。大公爵の缺席は、彼に對する最初の見せしめであつて、また彼の未來に對する威嚇であつた。

公衆は、主人たる大公爵より一層多くの熱心を示しはしなかつた。客席の三分の一餘りは空いてゐた。クリストフは、子供の折の自分の音樂會がいつも満員だつたことを、苦々しく考へ出さざるを得なかつた。もし彼がもつと經驗を積んでゐたら、その變化に驚きはしなかつたらう。つまらない音樂を作つてゐる時より立派な音樂を作つてゐる時の方が、聽衆の來るのが少い事を、彼は當然だと思つたであらう。公衆の大多數に興味を興へるものは、音樂ではなくて音樂家である。既に大人になつて皆と同じやうにしてゐる音樂家が、人の感傷性に觸れ好奇心を喜ばす小僧つ兒の音樂家より、興味を興へることが少いのは、極めて明かな事である。

クリストフは、客席の塞がるのを空しく待ちつくした後で、遂に開演しようと決心した。さうして彼は、「少くともよき友」の方がいゝといふことを、自ら證明しようと試みた。——が彼の樂天思想は長く續かなかつた。

楽曲は沈黙のうちに展開していった。——愛情が充ちて今にも溢れんとしているのが感ぜられるやうな、聴衆の沈黙もある。然し今この沈黙の中には、何もなかつた。皆無だつた。全くの眠りだつた。虚無だつた。各樂句が無關心の淵の中に沈み込んでゆくのが、感ぜられた。クリストフは、聴衆に背中を向け、管絃樂隊に氣を配つてはゐたが、それでも内心の一種の觸角を以て、客席で起つてゐる凡てのものを感知してゐた。この觸角は、眞の音楽家には皆具つてゐて、自分の演奏してゐるものが、周囲の人々の心の奥に反響を見出し得るかどうかを、知り得させるものである。クリストフは、土間や後ろの棧敷から起る倦怠の霧に凍えながら、なほ續けて指揮棒を振り、自ら興奮していった。

遂に序樂は終つた。聴衆は拍手した。鄭重に冷かに拍手して、それから静まり返つた。クリストフは寧ろ、聲を立てられる方を好んだであらう。……口笛、たゞ一つの口笛でも！何か生々とした兆、少くとも作品に對する反對の兆でも！……彼は聴衆を眺めた。聴衆は互に見合してゐた。互の眼の中に意見を探してゐた。然し彼等はそれを見出し得ないで、また無關心な態度に返つた。

音樂は再び初つた。此度は交響樂シムフォニーの順であつた。——クリストフは終りまで續けるのに非常に困難を覺えた。幾度も彼は指揮棒を捨て、逃げ出したくなつた。聴衆の無感覺に包み込

まれて、遂に彼は指揮してゐることもはや自分で分らなくなり、もはや息をすることも出来ないほどになり、底知れぬ倦怠のうちに陥るやうな心地をはつきり感じた。或る部分で彼が期待してゐた、嘲笑の囁きさへなかつた。聴衆は番組を讀み耽つてゐた。番組の頁が一時にさら／＼とくめり返される音を、クリストフは耳にした。そしてまた寂然としてしまつた。そのまゝ最後の諧音に達すると、やはり前と同じ鄭重な拍手が起つて、曲が終つたのを彼等が了解したことを漸く示した。——それでも他の喝采が止んだ時に、孤立した拍手が三つ四つ起つた。然しそれも何等の反響をも得ないで、極り悪さうに静まつてしまつた。そのため空虚は更に空しく感ぜられてきた。そしてこの一寸した出來事は、聴衆が如何に退屈してゐたかを僅かに示してくれた。

クリストフは自分の管絃樂隊の眞中に坐つてゐた。左右を眺めるだけの元氣もなかつた。泣き出したかつた。と同時にまた、憤怒の情に震へてゐた。立ち上つて皆にかう叫びたかつた。「僕は君達が厭だ、厭で堪らないんだ！もう我慢が出来ない！……出て行つてくれ、出て行つてくれ、みんな！……」

聴衆は少し眼を覺しかけてゐた。彼等は女歌手を待つてゐた——彼女を喝采するのに馴れてゐた。羅針盤なしに迷ひ込んだその新作の太平洋中では、彼等にとつて、少くとも彼女は安

全なものであり、身を亡す危険のない案内知つた堅固な陸地であつた。クリストフは彼等の考へを見て取つて、苦笑を洩した。歌手の方でも同じく、聴衆に待たれてることを感づいてゐた。クリストフは彼女の出る番であることを知らせに行つた時、彼女の尊大な様子でそのことを見て取つた。二人は敵意を含みながら顔を見合つた。クリストフは彼女に腕も貸さないで、両手をポケットにつゝ込み、そして彼女を一人で舞臺にはひらした。彼女は憤り度を失ひながら、彼の側を通り越した。彼は退屈な様子でその後を随つた。彼女が舞臺に現はれるや否や、聴衆は喝采して迎へた。それは彼等にとつて一の慰藉であつた。顔は輝き出し、一齊に元氣づき、双眼鏡は頬に持つてゆかれた。彼女は自分の力を確信してゐて、勿論自己流に歌唱曲を歌ひ出し、前日クリストフから爲された注意を少しも顧みなかつた。伴奏してゐたクリストフは眞蒼になつた。彼はその背反を豫想してゐた。彼女が違つた歌ひ方をするに、彼はピアノの上を叩き、怒氣を含んで云つた。

「違ふ！」

彼女は歌ひ續けた。彼は低い怒り聲をその背中に浴せた。

「違ふ！ 違ふ！ さうぢやない！……さうぢやない！……」

聴衆には聞えないが、管絃樂隊には漏れなく聞える、その憤怒の小言に、彼女は弱らされ

ながらも、なほ頑固に續けて、過度に調子をゆるくし、半休止や全休止をやたらに交へた。彼はそれを構はずに先へ進んだ。しまひに二人の間は一曲節だけ距つた。聴衆はそれに氣付いてゐなかつた。クリストフの音楽は快いものにもまたは耳に聴き易いものにも出来上つてはゐないといふことは、既に久しい以前から一般に認められてゐたのである。然し同意見でなかつたクリストフは、物に憑かれたやうな擧め顔をしてゐた。そして遂に破裂した。彼は樂句の途中でびたりと弾き止めた。

「もう澤山だ！」と彼は胸一杯に叫んだ。

彼女は勢に驅られて、なほ半曲節ばかり續け、そして漸く歌ひ止めた。

「澤山だ！」と彼は冷かにくり返した。

聴衆は一時惘然とした。やがて彼は冷酷な調子で云つた。

「やり直すんだ！」

彼女は呆氣に取られて彼を眺めてゐた。その両手は震へてゐた。彼女は彼の頭に樂譜帳を投げつけたいと思つた。後になつても彼女は、どうしてそれをしなかつたのか自分でも全く分らなかつた。然しクリストフの威嚴と返答を許さないその調子とに、彼女は壓服されてゐた。——彼女はやり直した。一聯の歌唱曲を悉く、一の音調をも一の速度をも變へないで歌

つた。なぜなら、彼が何物をも假借しないだらうと感じてゐたから。そして、またしても侮辱を受けやすまいかと考へては戦いてゐた。

彼女が歌ひ終ると、聴衆は熱狂して呼び返した。彼等が喝采してゐるのは、歌唱曲をではなかつた(彼女がたとひ他の曲を歌つたのであつても、彼等は同じやうに喝采しただらう)、名高い老練な歌手をであつた。彼女を賞讃しても安全であると彼等は知つてゐた。その上、侮辱の結果を彼女に償つてやるつもりもあつた。歌手が間違へたのだといふことを、よくは分らなかつたが漠然と悟つてゐた。然しクリストフがそれを皆の前にさらけ出したのは、恥知らずな仕業だと考へてゐた。彼等はそれらの楽曲を復吟させようとした。然しクリストフは斷乎としてピヤノを閉ぢてしまつた。

彼女はその新たな無禮に氣付かなかつた。餘りに惑亂してゐて、再び歌はうとは思つてゐなかつた。いきなり舞臺から出て、自分の室に引籠つた。其處で十五分餘りの間、積り重つた怨みと怒りから、心を和げようとした。神経の發作、涙の洪水、憤激した罵詈、クリストフに對する呪咀——何一つ缺けてはゐなかつた。閉め切つた扉越しに、激怒の叫びが聞えてゐた。その室にはひり得た友人等は、其處から出て來ると、クリストフが無頼漢のやうな振舞をしたのだとふれ歩いた。その話はすぐに聴衆へ傳はつた。それでクリストフが、最後の

の楽曲のため演奏壇に上つた時、聴衆はどよめいた。然しその楽曲は彼のではなかつた。クリストフが親切にも番組に加へてやつた、オックスの祝典行進曲だつた。その平板な音楽に安易を覺えた聴衆は、大膽に口笛を鳴らすほどのことをしないで、クリストフに對する非難を示すべき最も簡単な方法を取つた。彼等は大袈裟にオックスの作を喝采し、二三度作者を呼び出した。オックスはその毎に必ず姿を現はした。そして、それがこの音樂會の終りだつた。

讀者のよく推察する如く、大公爵や宮廷の人々——饒舌で而も退屈してゐるこの田舎の小都會の人々——は、右の出來事の些細な點をも聞き洩さなかつた。女歌手の味方である諸新聞は、その出來事には言及しなかつたが、筆を揃へて彼女の技倆を賞揚し、而も彼女が歌つた歌唱曲は、たゞ報道として列擧したに過ぎなかつた。クリストフの他の作品については、どの新聞も大差なく、僅かに數行の批評のみだつた。「……對位法の知識。錯雜せる手法。靈感の缺除。旋律の皆無。心の作に非ずして頭の作。誠實の閑却。獨創的たらんと欲……。」——その次に、既に故人となつて地下に埋もれてゐる人々、即ち、モツァルト、ベートーヴェン、レーフェ、シューベルト、ブラームスなど、「自ら希はずして獨創的たる人々、」さういふ人々の獨創に就て、眞の獨創に就て、一項が添へてあつた。——それから次に、自然の

順序として、コンラード・クロイツェルの「グラーナダの露營」が大公劇場で新らしく再演されることに、説き及ぼしてあつた。「書き下されたばかりのものかと思はれるほど清新華麗なその美妙的な音楽」のことが、長々と報道されてゐた。

之を要するに、クリストフの作品は、最も好意を有する批評家達からは、驚くべき全然の不理解を受け、——少しも彼を好まない批評家達からは、將來の攻撃をたくらんでゐる陰險な敵意を受け、——終りに、味方の批評家にも敵の批評家にも指導されない大部分の公衆からは、沈黙を蒙つたのである。公衆は自分自身の考へに放つて置かれると、何にも考へないものである。

* * *

クリストフは落膽してしまつた。

彼の失敗は然しながら、何も驚くには當らなかつた。彼の作品が人に喜ばれなかつたのは、三重の理由があつた。作品はまだ十分に成熟してゐなかつた。第二に、即座に理解されるには餘りに進んでゐた。最後に、傲慢な青年を懲らしてやることが人々には極めて愉快だつ

た。——然しクリストフは、自分の失敗が當然であることを認めるには、十分冷靜な精神を具へてゐなかつた。世人の長い不理解と彼等の癒す可らざる愚蒙さとの、悲しい經驗を嘗めてゐることによつて、心の清穩を眞の藝術家は得るものであるが、クリストフには特にそれが缺けてゐた。聴衆に對する卒直な信頼の念と、造作なく當然得られるものと思つてゐた成功に對する信頼の念とは、今や崩壊してしまつた。敵を持つのは固よりであると彼は思つてはゐた。然し彼を茫然たらしめたのは、もはや一人の味方をも持たないことであつた。彼が頼りにしてゐた人々も、今迄は彼の書く物に興味を持つてたらしく思へる人々も、音樂會以來は、彼に一言奨励の言葉をもかけなかつた。彼は彼等の胸中を探らうとつとめた。然し彼等は曖昧な言葉の蔭に隠れてしまつた。彼は固執して、彼等の本當の考へを知りたがつた。すると多少眞面目に口を利いてくれる人々は、彼の以前の作品を、初期の愚かな作品を、彼の前に持ち出してきた。——隨つて彼は幾度も、舊作の名に於て新作が非難されるのを聞かされる破目になつた——而もそれは、數年以前には、當時新しかつた彼の舊作を非難した人々からであつた。さういふのが世間普通のことである。然しクリストフはそれに同感出來なかつた。彼は怒鳴り聲を立てた。人から愛されなくとも結構だ。彼はそれを忍び得た。却つて嬉しいくらいだつた。凡ての人の友たることを望んではゐなかつた。けれども、愛してゐるふ

りをされるのは、或は生長するのを許されないのは、生涯子供のまゝで居ることを強ひられるのは、それは餘りのことであつた！ 十二歳にしてはいゝ作も、二十歳にしてはもういゝ作ではない。そして彼はそのまま、停滞しようとは思はなかつた。なほ變化し、常に變化したいと思つてゐた。……生命の停滞を望む馬鹿者共！……彼の幼年時代の作品中に在る興味は、その幼稚な未熟さに依るのではなくて、未來のために芽を出してゐる力に依るのであつた。そしてこの未來を彼等は亡ぼさうと欲してゐたのだ！……否、彼等は彼が如何なる者であるかを嘗て理解しなかつた。昨日も今日と同じく彼を愛したことはなかつた。彼等が愛したのは、彼のうちの弱點、卑俗な點、凡庸な輩と共通な點、のみをであつて、眞に彼自身である所のものをではなかつた。彼等の友誼は一の誤解に過ぎなかつた……。

彼は恐らくこの誤解を誇張して考へてゐた。さういふ誤解の例は、新しい作品を愛することは出来ないが、それが二十年もの歳月を経ると心から愛するやうな、朴直な人々に屢々ある。彼等の虚弱な頭にとつては、新しい生命は餘りに香氣が強すぎる。その香氣が時の風に吹き消されなければいけない。藝術品は時代の垢に埋れてから漸く、彼等に分り易くなり初めるのである。

然しクリストフは、自分が現在である時には人に理解されず、過去である時になつて人に理解されるといふことを、認めることが出来なかつた。それよりも寧ろ、全く、如何なる場合にも、決して、自分は人に理解されないと、好んで信じてゐた。そして彼は憤激してゐた。滑稽にも強ひて、自分を理解させようとし、説明し、議論した。固より何の役にも立たなかつた。それには時代の趣味を改造しなければならなかつたらう。然し彼は少しも狐疑しなかつた。否應なしにドイツの趣味を清掃しよう、と決心してゐた。然し彼には不可能のことだつた。辛うじて云ふべき言葉を見出した會話などでは、大音楽家等については相手についてまでも、自分の意見を極端な亂暴さで表白した會話などでは、彼は誰をも征服することは出来なかつた。益々敵を作り得るばかりだつた。彼が爲さなければならぬことは、ゆつくりと自分の思想を養つて、それから公衆をしてそれに耳を傾けしむることであつた。

そして丁度よい折に、運——惡運——が向いて来て、その方策を彼に齎してくれた。

三回り午後四時 三回り午後四時

ダンマソツイオ作
生田長江氏譯

■ 死の勝利

價壹圓五拾錢、送料拾錢

ダンマソツイオ作
宮島新三郎氏譯

■ 犠牲

價壹圓四拾錢、送料拾錢

モオバスサン作
廣津和郎氏譯

■ 女の一生

價壹圓參拾錢、送料八錢

ドオデエ作
武林無想庵氏譯

■ サフオ

價壹圓貳拾錢、送料八錢

此書の題材にとれるは、近代人の近代的特色を發揮したる戀愛也。接吻せられたる額の背にも自我の冷笑するを禁じ難き戀愛也。渴望と、唾棄と、同情と、敵意と、靈感と、淫靡とを一にしたる病的戀愛の一切也。近代の藝術界に於て最も權威ある傑作の一。

結婚生活に入れる男子が其快樂を擲にせる後、遊蕩に耽り、妻も亦他の男の誘惑に會うて不義の子を産む。後、夫は放蕩に飽きて元の樂しき家庭に戻らんとして、其闖入者たる不義の子を犠牲にすると云ふ、深刻の心理を描寫せるもの。稀有の傑作と稱せらる。

清純の處女が、默的なる男子に蹂躪せられ、其夢を破り、其一生の幸福を破るの徑路を描いて飽くまで追實、飽くまで精到。冷靜なる觀照の裏に自ら作者が痛烈なる皮肉を認め、荒涼たる人生の見るに堪へざる姿を示す。佛國自然派の典型的代表作也。

若き詩人と美しくしき女優との戀物語也。濃麗を極め豊麗を極め哀婉を極めたるに於て、爾餘の戀物語中此篇に及ぶもの無し。而も其溢るゝ迄にロマンズの甘美を漲らせたと共に深刻なる描寫を以て自然派の嚴肅を示せる所に、本篇の特色は存す。

51/864

ソルツ 懺悔 録

生田長江
大杉榮譯

全二冊

▼絶洋布最上製
▼壹圓五拾錢宛
▼送料各八錢宛

近代主義の第一人者たるルツソオが赤裸々の自傳にして、世界屈指の一大名著也。上巻は、一個鋭敏多感の少年が幾多の境遇に転轉しつゝある間に心身の次第に脱離め少く狀を描く。その少年の空想の華やかさ、とりとめもなき戀の歌々、更に性慾發展のすさまじさ、彼は些の憚るところなく巨細に之を書けり。下巻は、運命日に非にして、數奇更に數奇を重ねるルツソオの晩年を曲盡せるものにして、彼が面目愈々躍然、事實としての興味と感想の深刻なる點と愈々加はるを見る。

ツルゲエホフ著
生田春月氏譯 (第三版)

■散文詩■

何れも十行乃至二三十行の短文なるが、皆詩の時、哲學の哲學也。この大作家が一生の體驗を打ち込める無盡蔵の詩味、哲味、而して人生味は十度讀んで十様の意味、百度讀んで百様の意味を示すものあらん。

メエテルリンク著
吉江孤雁氏譯 (第三版)

■貧者の寶■

布表紙特製▼價七拾錢、送料八錢
心の貧しき者の爲に、其の幽妙の哲理を説ける世界的名著也。原文由來難解を以て稱せらる。而も譯文、流麗にして明暢、何人もよく讀む可し。眞に讀者努力の賜也。

外 1864

52

F53
R64.
(1)

終

